

宮城県一迫町文化財調査報告書第3集

# 上ノ原A遺跡

—弥生後期の住居跡—



昭和53年3月

一迫町教育委員会

# 上ノ原 A 遺跡

## 序

一昨年4月上ノ原遺跡の遺構確認のための本格的な発掘調査が、県教育庁文化財保護課の御協力により実施され、その調査結果の報告書が世に出されることは誠に意義深いものであります。

もとより、わが一迫町は、国史跡としての山王廻遺跡、その他の遺跡を持つ町として、文化財愛護に力を入れて参っておりますが、たまたま、文化財パトロール中に、本遺跡より天王山式と思われる土器の破片が発見され、その価値が確認された。しかし、又、砂防工事のためダンプカーの通り道としての計画が出され、更に遺跡周辺の土砂くずれがひどいため、遺構の範囲確認を目的とする発掘調査を緊急に実施したものです。

調査の結果、今から約1400年前の、弥生時代後期の竪穴住居跡であることが判明しました。しかも、天王山式土器が、他の時代のものを含まず、まとまって出土し、さらには住居に使用した木材が炭化された状態で出土していることは、学術的にも価値の高いものとして評価され、当時の住居生活の一端を窺い知ることのできる貴重な遺跡であることが確認されました。

上ノ原の住居跡に立ち、土器石器の破片を手にすると、遠い我々の祖先の温かなぬくもりを感じ、額に汗して築いた文化が現在の文化の底流をなすものであり、切れ目なく我々に引き継がれていることに今更ながら深い感動を覚えます。文化は時代の変遷とともに進展するものであるが、その底流には変化がなく、常に生活の知恵の極限を求め続けているように思えます。

調査期間中、地元地権者の方々の絶大な御協力を受け、滞りなく調査も進行し、貴重な文化遺産保存の見通しのついたことは、調査の成果とともに喜びにたえないものであります。最後になりましたが、文化財保護の為、現地に何回も足を運び、長期間に亘る発掘調査、及び報告書作成にあたって御指導、御協力をいただいた県教育庁文化財保護課の方々、このような貴重な調査報告書におまとめいただいた佐藤信行先生に深く感謝申し上げるものであります。この報告書が学界の方々及び広く一般の方々にご活用いただければ、なお幸いとするものであります。

昭和53年3月

一迫町教育委員会 教育長 大場秀雄

## 序

源流を稻作渡来文化に負う弥生式文化を、東北地方で追求する場合、その貧弱性の故に研究の困難なことは、関東地方以西に比べて段違いなものがある。

本県は、それでも先学によって樹形団、福浦島、南小泉等の諸遺跡が戦前に、そして戦後になって大泉、崎山団、山王、鱸沼等の遺跡が、続々、発見調査されている。

しかし、いずれも弥生文化期前半に属する遺跡のみであり、次期・古墳文化期の前代を占める弥生文化期後半の良好な遺跡の発見には恵まれず、弥生文化研究上の盲点をなしていた。

昭和51年、町内川口在住の三塚信一氏（日本考古学会員）は、町内、上ノ原遺跡を數十回に亘ってパトロール中、弥生式後半の遺物を包含する住居跡らしい一画を発見し、氏のもとに出入りしていた瀬峰町在住の佐藤信行氏（後に日本考古学協会員）に連絡した。佐藤氏は、事の重大性におどろき、地主の諒解を得て町当局、県文化財保護課に連絡、応援を求めて発掘調査の計画を立て、当時、一迫町を去って仙台市に転居していた興野義一（日本考古学協会員、一迫町史編纂委員）を発掘担当者として、正式発掘に踏み切った。

本州、北日本に特有な、弥生式後半期の天王山式期遺跡の発掘例は決して多くはなく、福島、岩手、秋田、新潟の各県に5遺跡位なものである。今回の上ノ原A遺跡の発掘によって、本県では初めての、しかも住居跡発見、天王山式の一括土器の出土、各種石器類の伴出、保存の良い炭化材の発見という、誠に恵まれた成果を挙げる事ができた。

これも、三塚信一氏の明、佐藤信行氏の断、それに地権者、町当局の理解と協力があってこそ、稀有な天王山式住居跡遺跡は、破壊と湮滅から救われたのである。あらためて関係者各位に深謝する次第である。

昭和53年3月

発掘担当者 興野義一

# 目 次

序 一迫町教育委員会教育長 大場 秀雄

序 発掘担当者 興野 義一

## I 調査経過

- |                   |   |
|-------------------|---|
| 1. 発掘調査に至る経過..... | 1 |
| 2. 発掘経過.....      | 2 |
| 3. 発掘後の経過.....    | 4 |

## II 遺跡の位置と環境

- |                          |   |
|--------------------------|---|
| 1. 上ノ原A遺跡の地理的環境.....     | 5 |
| 2. 上ノ原A遺跡の考古学的環境.....    | 5 |
| 3. 上ノ原A遺跡周辺の後期弥生式文化..... | 8 |

## III 遺構及び炭化材

- |             |    |
|-------------|----|
| 1. 遺構.....  | 17 |
| 2. 炭化材..... | 20 |

## IV 出上遺物

- |                 |    |
|-----------------|----|
| 1. 遺物の出土状況..... | 26 |
| 2. 土器.....      | 28 |
| 3. 石器.....      | 39 |

## V 考察

- |                          |    |
|--------------------------|----|
| 1. 天王山式期の住居跡をめぐって.....   | 46 |
| 2. 上ノ原A遺跡出土土器の編年的位置..... | 55 |
| 3. 上ノ原A遺跡出土石器をめぐって.....  | 60 |

## VI まとめ.....

- |                     |    |
|---------------------|----|
| (付) C-14年代について..... | 66 |
|---------------------|----|

## 例　　言

1. 本書は、昭和51年4月に発掘調査を実施した宮城県栗原郡一迫町上ノ原A遺跡の学術調査報告書である。本書をもって今次調査の正式報告書とする。
2. 本書の執筆は、II-1を三塚信一、III-1を高橋守克が当たったほかは佐藤信行が担当した。執筆に際して三宅宗議の助言を得た部分がある。
3. 遺物整理は佐藤信行が主に行なった。尚、No.1～3土器の復原については、宮城県教育庁文化財保護課の手を煩わせた。
4. 写真撮影は、遺構関係を金野正、遺物関係を三宅宗議が担当した。
5. 地形測量図は一迫町建設課及び宮城県古川工業高等学校教諭遠藤昭二、森潔英尚氏と同校土木研究部が作成した。また遺構実測図の作成は高橋守克が当り、遺物実測図は三宅宗議が作成した。
6. 本書の編集は佐藤信行、鶴田勝彦、桜井幸喜、三宅宗議が行なった。
7. 発掘調査及び本書の刊行に当たり、特に次の各氏及び各機関の御指導御協力を頂いた。記して謝意を表する。  
伊東信雄(東北大学名誉教授)、中村五郎(福島県文化財専門委員)、藤田定興(福島県歴史資料館)、石野博信(奈良県橿原考古学研究所)、藤沼邦彦(東北歴史資料館)、岡村道雄(東北歴史資料館)、宮城県教育庁文化財保護課、東北大学文学部考古学教室
8. 本書第1図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の~~25000~~地形図を複製したものである。(承認番号・昭53・東復第321号)
9. 本書に使用した、遺跡付近の空中写真は、宮城県教育庁文化財保護課の提供による。
10. 本書で記載した土色については「新版標準土色帖」(小山・竹原:1967)によった。
11. 出土遺物は、報告書作成後、一括して一迫町教育委員会において保管し、一部は一迫町中央公民館に陳列してある。
12. 本書を、一迫町文化財調査報告書とした。一迫町教委では、既に『史跡・出土品遺跡保存管理計画書』1976.3及び『巻鼎遺跡』1977.3を発行しているので、本書は報告書の第3集となる。

## I 調査経過

### 1. 発掘調査に至る経過

1976年秋、佐藤信行は三塚信一宅を訪問した際、上ノ原丘陵北端部で、かなりの土器を採取したと言われ、その遺物を展示された。遺物は平箱一杯分程の土器片で、土器は、その模様、地紋等の特徴から、上ノ原遺跡の数地点で出土する土器と同じく、弥生後期の所謂天王山式土器に近似する事を確認した。

三塚の説明によると、数日前、山菜採りを兼ねた遺跡パトロール中、上ノ原丘陵の北端部に、狭い範囲に土の移動、盛土が認められ、多数の土器片が散乱していたので、遺物の採集に努めると同時に、同地の地主に会い、遺物の出土状況等を聴取した。それによると、“冬場の野菜確保の為、遺物出土地点に、径1.5m、深さ0.6mの大根坪を掘ったところ、かなり大きな土器破片が大量に出てきた為、邪魔になるのでそれらを集めて同地点の西、約50mの崖から谷に投棄した。”という。

三塚は、早速その崖下を探査したが、崖面の崩壊が早く、投棄された遺物を採集することはできなかった。

佐藤は、早速三塚の案内で現地を踏査した。その結果、①出土の遺物が、所謂天王山式土器に限定されること、②大根坪の周囲には、まだかなりの遺物が埋蔵されていること、③ボーリング探査の結果、遺物の出土する地点に落ち込みが確認され、何らかの遺構の存在が想定されること、④同地点一帯は砂質土で、長芋、ごぼう等根菜類栽培に適しているため、極度の破壊を受けており、土器出土地点も破壊されるのは時間の問題であること、等の諸点からして、早急な遺跡の保存措置、または、記録保存の為の調査が必要と認められたのである。

一方、東北地方の後期弥生式としての天王山式文化は、その特異な出土土器により、つとに著名であるが、反面、①文化内容、②発生と終末の様相、③天王山式文化の特質等については、ほとんど解明されていないのが現状である。そのうちでは比較的認識されているはずの①についてさえ、福島県天王山遺跡における内容がおよそすべてで、他にそれを補うだけの内容を持つ遺跡の発見は、天王山式の設定以後20数年を経た今日に至るまでなされていない。

天王山式文化における葬制、或いは住居、集落の形態、構造に関しては、具体例の発見が乏しく、全くの未知数の状態にあるといえる。

東北地方を中心として、濃密な遺物散布地がブロック状に形成されるが、各遺跡から発見される天王山式土器は微量で、セット関係を示す好例は少ない。その為、所謂天王山式土器 자체の分類、類型化がほとんど進んでいない。従って、天王山式土器のバリエーションと各地域の

ローカルカラー、更に、縦の関係を示すと思われるものまでが混然一体となっているのが現状である。

以上の如き情勢から、上ノ原A遺跡の占める学術的価値は極めて高いものであることが推測された。そこで、佐藤は興野氏に指示をあおぎ、興野氏、三塚、佐藤等で協議の結果、中途半端な一時しのぎの保存措置を講ずるよりも、むしろこの際、正確な記録保存を残すことと、学問上のメリットを得るという二面性から、発掘調査を行うのが最も妥当であるという点で意見の一一致をみた。

その協議の結果を町教育委員会に具申し善処方を求めた。町サイドで協議の結果、発掘調査に同意、依頼する旨の回答があり、早速、発掘の実際についての協議を両者で行い、調査を実施することとした。

## 2. 発掘経過

発掘調査は次の要項で実施した。あわせて発掘の経過を略記する。

### 調査の要項

1. 遺跡所在 宮城県栗原郡一迫町字川口乳母沢78、94の49（通称上ノ原）
2. 調査期日 昭和51年4月1日から、昭和51年4月6日まで 6日間
3. 調査主体 宮城県栗原郡一迫町教育委員会教育長 大場秀雄
4. 調査担当 日本考古学協会員 興野義一
5. 調査員 日本考古学協会員 佐藤信行  
日本考古学会員 三塚信一  
一迫町文化財保護委員会副委員長 遠藤主税  
宮城県築館女子高等学校教諭 金野正  
宮城県古川工業高等学校教諭・日本考古学協会員 三宅宗謙  
宮城県古川工業高等学校教諭 矢田勝彦  
宮城県古川工業高等学校実習助手 桜井幸喜  
瀬峰町郷土研究会員 佐々木尚見
6. 調査参加・協力者  
宮城県教育庁文化財保護課・白鳥良一 高橋守克 阿部忠 丹羽茂 斎藤吉弘  
東北歴史資料館・藤沼邦彦、仙台市教育委員会社会教育課・岩渕康治  
一迫町文化財保護委員・佐藤忠雄 新妻巖、瀬峰町郷土研究会員・佐々木徳雄  
瀬峰小6年・石井正文、東北大学文学部考古学教室  
地権者・田代秀男、遊佐義臣

7. 事務局 一迫町中央公民館長・首原功、同中央公民館副館長・真山静、同教育委員会文化財係・鈴木広臣、同教育委員会主事・中鉢孝志 小柳寛 小野昭光

#### 発掘の経過

- 4月1日 曇 A.M 9:00～P.M 5:30 調査員12名

午前9時現場到着、簡単な打合せを行い直ちに作業開始。昨年11月、遺物が多量に発見され、今回の調査の発端となった大根坪を中心に、6m×6mのトレーナーを設定、3m×3mに四つに区切り、1～4区とする。

2、3区は層序が比較的単純で、遺物の出土もほとんどない。遺物は、4区の東半分に集中して出土する。

4区北西部から1区中央部にかけて黒色の落ち込みの輪郭線が現れた。この落ち込みの内部には多量の炭化材と焼土が含まれている。この落ち込みの輪郭が更に北東に延びていると判断されたので、4、1区の東側に3m×3m延長して、5、6区とする。5、6区の荒掘り途中で本日の作業終了。

- 4月2日 晴～時雨 A.M 8:30～P.M 5:30 調査員10名

午前中5、6区発掘。1、4区とほぼ同じレベルまで掘り下げるが、4区に集中していた遺物の掘がりは5、6区までは延びていない。1、4区で現れた輪郭を追求するが、はっきりしない。

輪郭線の壁際から内側に向かって、ほぼ等間隔に落ちているらしい炭化材が現れた。落ち込みは、その輪郭や炭化材の出土状況から見て、長方形、または方形の竪穴住居であろうと推定された。

- 4月3日 晴～時曇 A.M 9:00～P.M 5:30 調査員15名

4区の堆積土上部に、一括出土した土器群の出土状況実測。

5、6区の精査に併行して通り方用の杭打ち。1、4区の竪穴のコーナーが、5、6区でははっきりしないため、更にその北東に1m延長する。4区から土器に混じって石器類が出土。

県教委の阿部氏の他に白鳥、高橋尚氏が加わって作業がはかどる。

- 4月4日 晴 A.M 8:30～P.M 5:30 調査員16名

今日は日曜日のため、各機関有志の応援があり、作業が大いにはかどった。

午前中、畦のセクション図作成。完了後、畦を外し、竪穴のコーナーを確認。床に密着して、保存のよい炭化材が現れる。どうやら、竪穴の面サイドにはほぼ同じ形態で遺存しているらしい。

興野氏の案内で、伊東信雄、中村五郎両氏来跡、現地指導をいただく。町三役の視察、ほか見学者多数。

- 4月5日 晴 A.M 9:00～P.M 6:00 調査員8名

午前中、4区の一括土器出土状況実測後、取上げ。4区の炭化材精査と竪穴東側床面精査。

午後から、4区炭化材の実測、写真撮影。

● 4月6日 晴 A.M 9:00～P.M 5:00 調査員8名

午前 竪穴の平面図作成と床面の清掃及びピットの検出に努める。

午後から竪穴住居の再検討及び5、6区抜掘区の再検討。発掘区及び竪穴の全体写真をとる。

午後3時、調査完了。直ちにアルバイト学生とともに埋め戻しを行う。機材の取り片づけ後公民館に集合し、発掘遺物の整理、報告書の件等について簡単に打合せ後解散。

遺跡付近の地形測量図は、後日、一迫町建設課が行うこととする。

### 3. 発掘後の経過

発掘遺物の整理は、洗浄、ネーミング、接合の順で行い、復原作業の段階で、大形の3個体分の土器が、手許で復原困難の為、県文化財保護課に依頼した。発掘前に三塚氏によって採集された土器片の大部分も接合された。

報告書作成作業は、昭和52年春から準備を始め、同年9月執筆分担を決め、本格的執筆作業に入った。併行して、遺物実測、写真撮影、探査作業も行う。これらの作業は、すべて各執筆者の本務の合い間に行われた。

その間、館報「いちはざま」に発掘速報、栗原郷土研究第8号に「一迫町上の原遺跡調査概報」等を発表している。

53年春、宮城県古川工業高等学校土木科の遠藤、森岡教諭等によって、遺跡付近地形の補足調査が行われた。

尚、今回発掘地点周辺は、地権者の理解ある配慮によって、従来の長芋栽培を廃し、稲畑に転用されたため、ここ当分、破壊の危険は回避された。

## II. 遺跡の位置と環境

### 1. 上ノ原A遺跡の地理的環境

本遺跡は、宮城県の北西部、栗原郡一迫町字川口の西南、乳母沢（めどのさわ）（通称上ノ原）に所在する（第1図参照）。

この地域は、奥羽山系の鬼首カルデラからゆるやかな起伏をもった丘陵地が東に延び、栗原の耕土に臨む地帯である。その丘陵を東側は栗駒火山より発した一迫川が、西側は鬼首カルデラを源とする荒雄川（江合川）が、河岸段丘を形成しつつ、平行して東南方に流れている。その一迫川の支流である草木川と長崎川が本地域の北と南を大きく区切り、海拔135m～150m、河谷からの比高約50mの壠状の台地を形成している。台地は、石英安山岩の貫入と、同質凝灰堆積物により基盤を構成し、その上は黄褐色のローム層で厚く覆われている。

この台地“上ノ原”は、長崎丘陵から川口方面に張り出すカギの手状の丘陵の稜線上にあり、東西約700m、南北100m～150mの起伏の少ない細長い平坦面である。この“上ノ原”には、少なくとも3地点の遺物散布地が確認され、東から上ノ原A、B、C遺跡と呼んでいる。後述するように3地点からは、いずれも弥生後期の天王山式土器が発見されている。

上ノ原A遺跡は、上ノ原丘陵の東端部に位置し、乳母沢及び清水田の両浸食谷の作用により、東部及び南部より削られ、特に清水出の谷頭は浸食が甚だしく、大雨ごとに著しく崩壊し、既に本遺跡の東北部はその為に崩れ去っている状態にある。

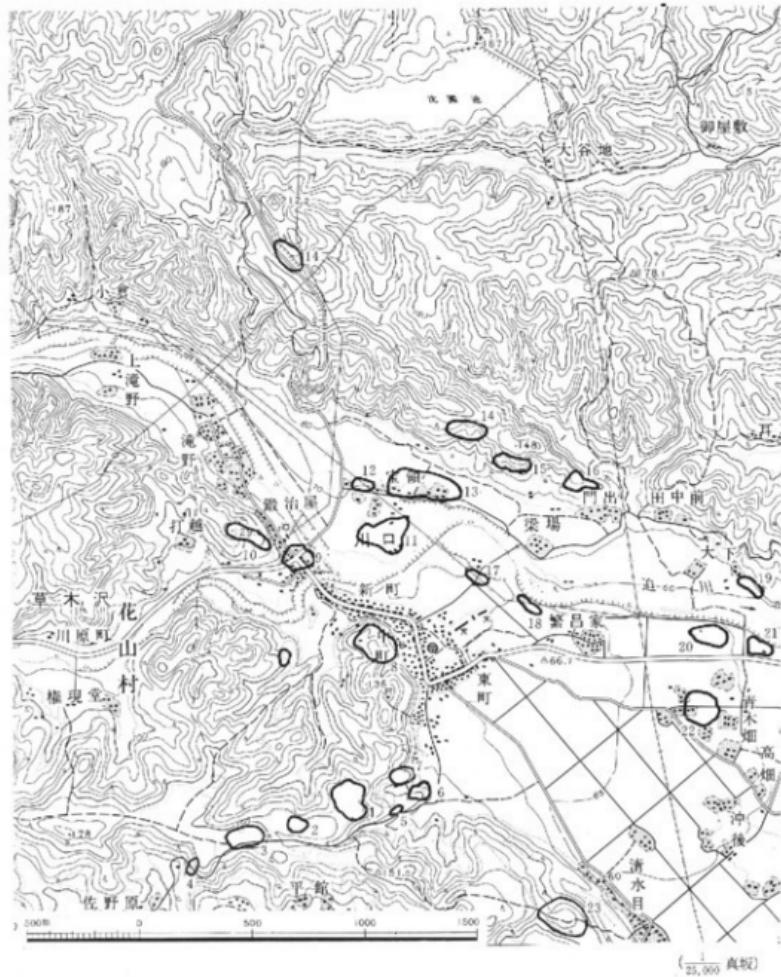
遺跡からの眺望はすこぶる良く、一迫の谷底平野が一望でき、遠く栗駒山より続く奥羽山系の山々が眺望できる。遺跡の西方300mの浸食崖下に3カ所の涌泉があり、今も近くの農家の飲料水と用水に利用されている。上ノ原A遺跡付近の標高は136.5mである。

### 2. 上ノ原A遺跡の考古学的環境

上ノ原A遺跡の所在する一迫町には、縄文時代の早期から平安時代に至る各時代、各時期の遺跡が、ほぼ万遍なく分布しており、降って中、近世の城館跡も数多く存在する。県北では、岩出山に次いで考古学的遺跡の多彩な地域である。

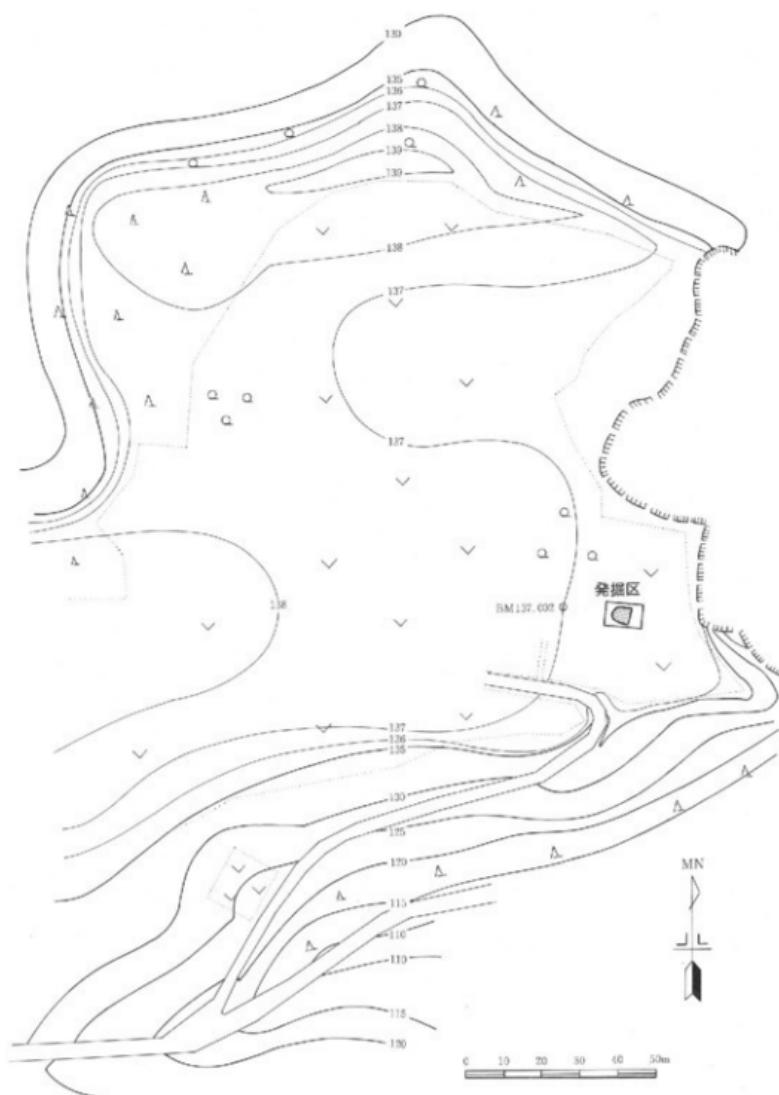
一迫町の北西部を占める川口地区に特に遺跡の分布が多い。それは、地理的環境に起因していると思われる。前項の地理的環境を補足するなら、川口地区は、草木川と花山ダムから流下した一迫川の合流地点であり、洪積地が急激に広がる地点でもある。遺跡は、その洪積地及び一迫川の南岸に発達した丘陵の稜線、中腹のいたるところに分布している。<sup>註1)</sup>

本遺跡の東南方約2.5kmに四史跡・山王匪遺跡（縄文晩期、弥生中期）、北東方1kmに青木畠遺



1. 上ノ原A遺跡(弥生)  
 2. 上ノ原B " ( )"  
 3. 上ノ原C " ( )"  
 4. 佐野原 " ( )"  
 5. 烧母沢 " (绳文)"  
 6. 幼稚園内 " (绳文)"  
 7. 清水田 " (绳、平)"  
 8. 川口船跡  
 9. 鎌治屋遺跡 (绳文)  
 10. 亀山 " (苏、平)"  
 11. 卷堀 " (绳、平)"  
 12. 宝瓶西 " (绳文)"  
 13. 宝領遺跡 (绳、平)  
 14. 山館横穴古墳群  
 15. 山館跡  
 16. 門出船跡  
 17. 梁場遺跡 (绳文)  
 18. 河原跡 " (绳、弥)"  
 19. 大下 " (平安)"  
 20. 反町 " (绳文)"  
 21. 青木畠 " (绳、弥)"  
 22. 的場 " (绳文)"  
 23. 清水日館跡

第1図 上ノ原A遺跡位置図



第2図 上ノ原A遺跡付近地形図

<sup>註2)</sup> 跡(縄文中期、弥生中期)、北方1kmに巻堀遺跡(縄文中期、晚期、平安時代)等の県内屈指の著名遺跡が存在する。

上ノ原A遺跡と同一丘陵上には、後述する上ノ原B、C遺跡の他に、佐野原遺跡(弥生後期)、山ノ神遺跡(縄文早期、前期、弥生後期)、大穴山遺跡(縄文早期、前期、弥生後期)等が、多少の高低差をもって分布する。丘陵斜面から麓にかけて、川口幼稚園内遺跡(縄文早~中期、統縄文中期、平安時代)、清水田遺跡(縄文早、前期)、丘陵下の一迫川南岸第2河岸段丘面に、西から鍛冶屋遺跡(縄文中、後期)、河童淵遺跡(縄文晚期、弥生中期)、青木畠遺跡(縄文中~後期、弥生中期)、反町遺跡(縄文中~後期)、の場遺跡(縄文中期末)等が群集する。<sup>註3)</sup> 一迫川北岸には、第1段丘面に巻堀遺跡(前述)、第2段丘面に宝領遺跡(縄文前~後期、平安時代)、<sup>註4)</sup> 上戸遺跡(縄文晚期)、大下遺跡(平安時代)等が存在する。宝領遺跡の後背の丘陵中腹には、約40基からなる竹ノ花横穴古墳群があり、末期横穴古墳の北限線の一画を成している。

又、一迫川両岸の丘陵上には、庵野館、川口館、清水の目館、門出館、山館、赤松館等の中、近世の城館跡が分布している。

一方、一迫川両岸の、第1、第2段丘面の瀧野地区から真坂地区にかけて、広範囲に奈良末~平安時代の遺物が散布している。

以上、概観したように、上ノ原遺跡の周囲には数多くのしかも各期に亘る遺跡が群在するが、このことは、本地域が当時、生活の場として良好な条件下にあった事を物語っている。

尚、川口地区の考古学的遺跡の大部分については、三塚信一の研究成果に負うている。

## 註

1. 山王遺跡の調査は、故狩野文朗により昭和20年代から始められているが、山王遺跡の名を高からしめたのは、昭和40年の東北大による調査によってである。伊東信雄他「宮城県山王遺跡の発掘」協会第31回研究発表委員会 1965他
2. 1972年発掘調査「一迫町青木畠遺跡現況資料」宮城県教委、一迫町教委
3. 1976年発掘調査「巻堀遺跡」一迫町教委 1977
4. 1977年発掘調査 佐藤信行「一迫町宝領遺跡発掘調査報告」栗原郷土研究9号

## 3. 上ノ原A遺跡周辺の後期弥生式文化

一迫川流域の後期弥生式遺跡は、一迫町西部川口地区の丘陵地帯を中心に12遺跡を数える。遺跡のすべてが、いずれも、所謂「天王山式系」に属し、円田式、桜井式等の沈線文系の遺跡はみられない。

東北南半に主要分布図を持つ、円田式、桜井式期の遺跡は、主に沖積地、洪積平野やその縁辺に立地する場合が多い。

・追流域の後期弥生式遺跡は、一迫川と長崎川の中間に細長く延びる舌状の丘陵地帯に開花している。その標高は100～150m、現水田面との比高30m～60mである。いずれも眼下を一望できる景勝、或いは要害の地を適地している。

宮城県内における天王山式遺跡の分布状況は、散在的に各地域に分布しているのではなく、ある地域に密集して分布する傾向がある。そのような密集地帯は、玉造郡岩出山周辺地区、加美郡宮崎周辺地区、栗原郡・迫周辺地区等、主に県北地方の山沿い地帯に認められる。一方、県南地方でも、名取市西部から仙台市南西部にかけて一群を形成している。

次に、・迫周辺地区の後期弥生式の代表的遺跡について概述する。

#### 上ノ原B遺跡（第3図、第4図）

上ノ原A遺跡の南方約120mの地点にあり、上ノ原丘陵のほぼ中央部に位置する。遺跡の北西部は崖で、上ノ原丘陵の最も狭まる部分にある。昭和30年代、地主が耕作中、偶然土器群を発見した。発見状況は、ごく小範囲内から密集して土器が出土したという。出土遺物には、多量の土器片、アメリカ石器、土製紡錘車がある。土器には復原できるものはないが、かなり大型の破片を含み、天王山式系以外の形式を含まない。上ノ原A遺跡と出土状況、出土遺物が近似しており、ある種の遺構の存在が推定できる。

土器は、全体の器形を推定できるものはないが、大部分が壺形で、若干壺形が伴なう。

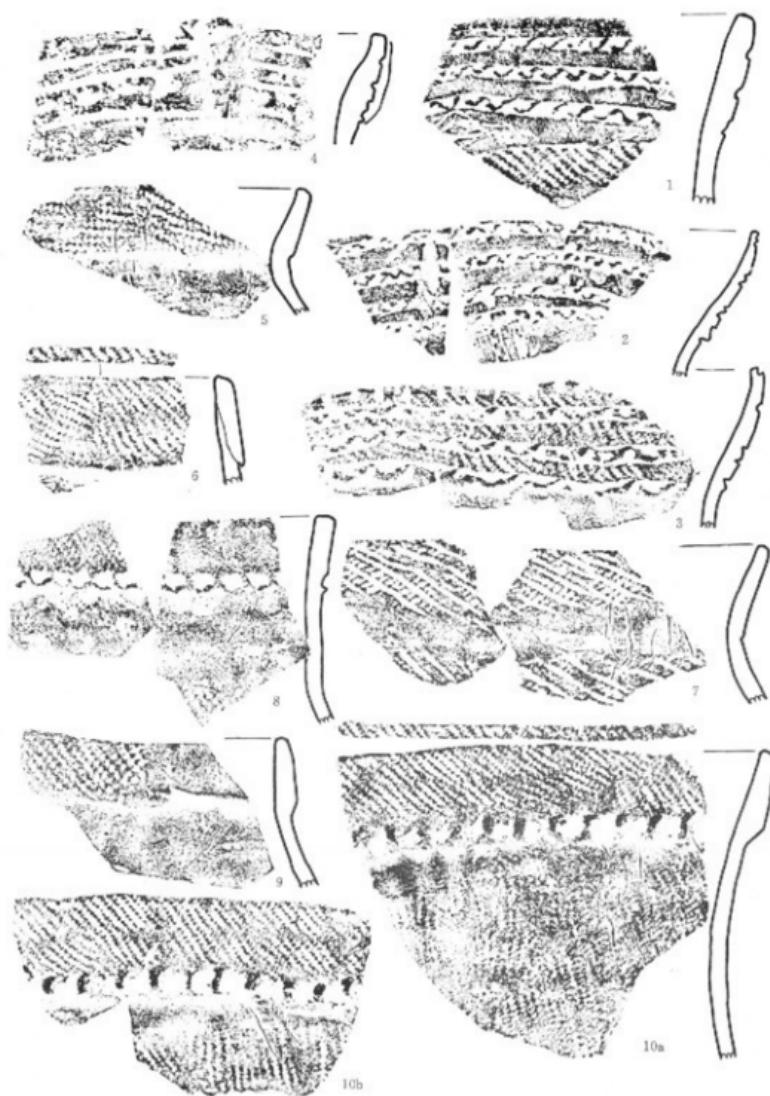
壺形には、口縁部に斜行縄文施文後（第3図3）、又は磨き調整後に、3～4条の交互刺突文を巡らすもの（第3図1、2）と、斜行縄文のみの見られるタイプ（第3図5、7）がある。

第3図4は、複合口縁上に4本の併行沈線が並び、その合い間に刺突列が巡り、ところどころを縦位の隆帯によって切っている。本遺跡の土器に付される縄文は、一般的なLR縄文のほかに異条斜縄文、階縄文、結節縄文等があり、底面にまで縄文が及ぶなど、縄文の多様化が認められる。土製紡錘車（第4図6）や石槍（第4図7）も數少ない例である。

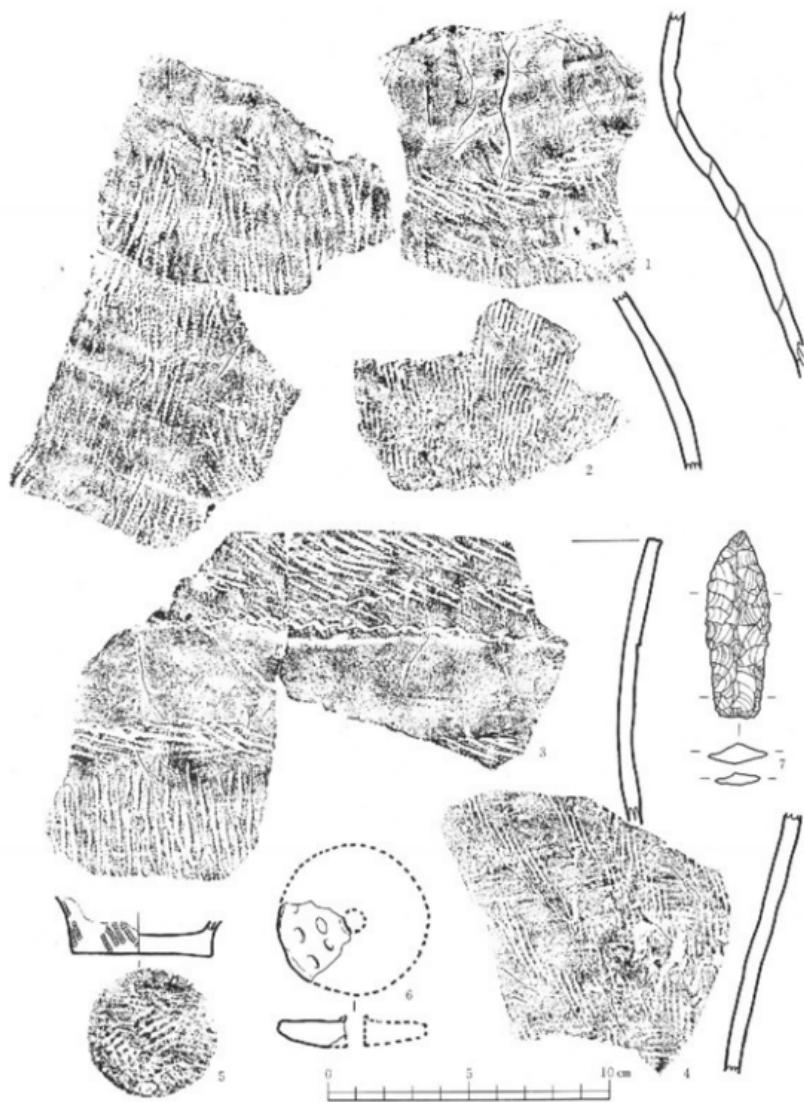
#### 上ノ原C遺跡（第5図上段、第6図）

上ノ原B遺跡から更に南西に300mの地点にあり、上ノ原丘陵の南西端に当たる。本遺跡は、東西約100m、南北約150mの広がりを有し、その中の数地点でやや集中的に遺物の散布が認められる。本遺跡からは、土器破片のほかに、土製紡錘車、小型のアメリカ石器が採集されている。採集土器は大部分が天王山式系で、縄文晩期末大洞A'式土器片が地点を異にして僅かに認められる。

土器はいずれも小片で、口縁部はいずれも1.5～3.5cmの幅で肥厚し、複合口縁を呈する。口縁部には縄文のみ充填されるもの（第5図1.2.3.5.6.14）、縄文を地文として2条の平行沈線を



第3図 上ノ原B遺跡出土土器拓影(I)



第4図 上ノ原B遺跡出土土器拓影③

巡らすもの（第5図7.8.10）、縄文を地文として平行する2～3条の縄文側面圧痕の見られるもの（第5図4・9）、がある。口縁部下端は交互刺突文、又は刺突、刻みによって限るものが大部分を占める。口縁部文様帶の下部には、縦位の縄文のみを充填する場合が多い。口縁部に、縦の隆起を附加する例（第5図17）もある。複合口縁をなさないものでは、斜位→縦位に縄文を施文し丹彩したもの、他には、磨消縄文の見られるもの（第5図16.17）、細沈線により平行工字文風に描かれるもの（第5図11）、特異な例では、数条の縦位沈線文と、横位の平行線文によって構成されるもので、平行線文は、単線と2本同時施文のものが交互し、その間に梢円状の刺突文列がめぐる。類例は、新潟県庵ノ前遺跡で確認されている程度であろう。

#### 山ノ神遺跡（第7図）

上ノ原A遺跡の北西0.8kmの地点にあり、丘陵裾部に張り出す舌状小丘陵上に立地する。遺物の散布面積は、50m四方でそれ程広くはない。縄文早期後半～前期初頭の遺物も見られる。

弥生式土器は、大きく二つのグループに分類することができる。一つは第7図1～5等で上ノ原A～C遺跡から出土するものとほぼ同じグループ、他の一群は第7図6～8.11等で、複合口縁をなさず、細沈線文、特殊な刺突文、特殊縄文によって特徴づけられ、興野氏によって第3類とされたものと同じ仲間である。両者の先後関係については確定していない。

土器底面には、木葉压痕、縄文、細沈線文様等の見られる場合が多く、第7図12は揚底風を呈する。他には土製紡錘車、縦長のアメリカ石巻等も発見される。

#### 大穴山遺跡（第5図下段1～13）

上ノ原A遺跡の南西約2kmの同一丘陵上に所在する。丘陵の頂部平坦面の東北部に、東西150m、南北100mに亘って遺物の散布が見られる。弥生式土器はいずれも天王山式系のもので、弥生式土器の外に、縄文早期中葉、前期後葉、晩期後葉のものが確認され、他に奈良～平安時代の土器が僅かに採集されている。

出土した弥生式土器はいずれも小片で、本遺跡出土遺物の大部分を所蔵する興野氏によって発表されるに伺っている。そのため手許資料で観察するが、これは大穴山遺跡出土の天王山系土器の一部を占めるにすぎない。

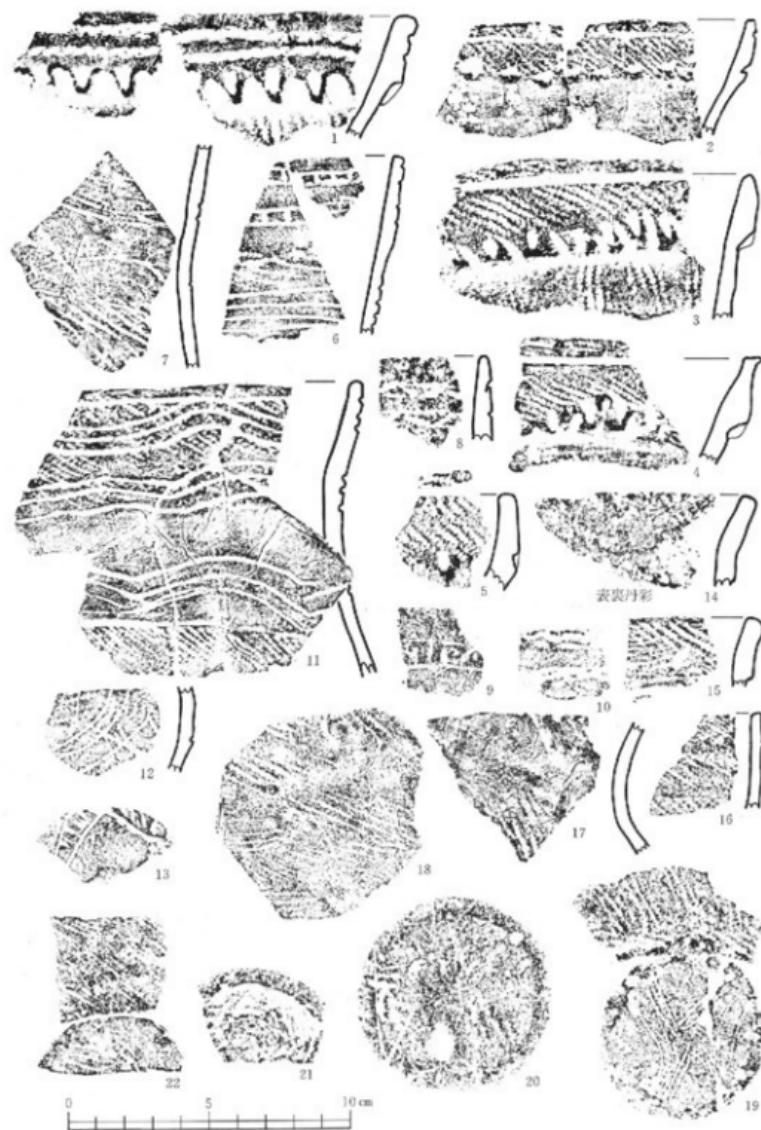
第5図1～3.8は複合口縁を呈する口縁部片で、1は右傾縄文、2は縄文を地文とし、沈線と刺突文が加わる。3は一条の突帯を巡らし、その上部を、斜め右から左に刺圧するもので、福島南部から茨城県にかけて分布し、井上義安氏によって駒船山式と呼ばれた一群の土器に共通する手法である。第7図8は、口縁部から頸部まで無文で胴部に縦走縄文が施文される。第7図9は胴部中腹に沈線文様が見られ、表面は第7図11と同様丹彩される。1、2は胴上部



第5図 上ノ原C遺跡(上段)大穴山遺跡(下段)出土土器拓影



第6図 上ノ原B、C各遺跡出土土器拓影



第7図 山ノ神遺跡出土土器拓影

破片で、上部に右傾の、以下には継走する帯縄文が見られる。縄文圧痕の単位は5本である。

#### マクス 馬喰遺跡

大穴山遺跡の西北、約4kmの地点にあり、山地間に張り出した丘陵の、急峻な突端部のすぐ後背のテラス状台地に所在する。遺跡の範囲は、東西約80m、南北約50mで、一面に縄文中期中葉、前期、晩期後半の遺物が散布する。弥生式土器は、遺跡のはば中央の10m<sup>2</sup>程の地点を深耕した際、焼土、焼石等と一緒にして出土したという。

上器はいずれも縄文の施文されたものだけで、有文の土器は未発見である。従って、その所属時期について明言はできないが、口唇部の小突起、縄文（単節の細縄文）、複合又は段状口縁部に縄文が施文されることなどから、弥生後期の仲間と考えている。但し、栗原地方の天王山系土器とは、若干異質なニュアンスも認められる。

以上、栗原北部地域後期弥生式の主要遺跡について概述した。以上の諸遺跡と上ノ原A遺跡との有機的関連は、遺跡の立地（丘陵頂部又は平坦面に立地する）、遺物の散布状況（小範囲に遺物が散乱する）、土器群に見られる諸特徴の類似性等から、両者がほぼ同時的存在であったか、又は極めて短時日をへだてて営まれた遺跡群であったと考えて誤りはなかろう。

また、上ノ原A遺跡を含む前述諸遺跡は、その出土遺物、散布状況、遺跡の範囲等から見て、関東地方の如く、数十軒を単位とする集落の存在を推定することは困難で、精々数軒を単位とする「家族的集団」によって構成されていたものと考えられる。その「家族的集団」が幾つか集合して「同族的集団」を構成していたのであろう。栗原北部における天王山式系遺跡の大部分は、まさにその「同族的集団」の単位であったと見たい。

### III 遺構及び炭化材

今回の発掘規模は、南北9.9m、東西6.0m、発掘面積59.4m<sup>2</sup>である。

発掘によって検出された遺構は、竪穴住居跡1棟である。

#### 1. 遺構

##### 基本層序

今回の発掘区における基本層序は次の通りである(第8図)。

I層 暗褐色(10YR 3/6)シルト層。表土である。層の厚さは約20cmである。

II層 黒褐色(10YR 5/6)シルト層。表土からの耕作による攪乱がかなりあり、その攪乱の為、本層の認められない所も多く存在する。層厚は約5~10cmである。

III層 褐色(10YR 5/6)シルト層。地山である。耕作による攪乱が地山まで及ぶ所がある。本層はかなり厚く、遺跡西辺の崖面の観察によると、何層かに区分され、その層厚は数mに及んでいる。

##### 竪穴住居跡

##### 遺構の確認

竪穴住居跡は、II層上面で確認された。しかし、発掘区内のII層は大部分が耕作による攪乱を受けているために、全体の輪郭を確認できたのは地山面である。

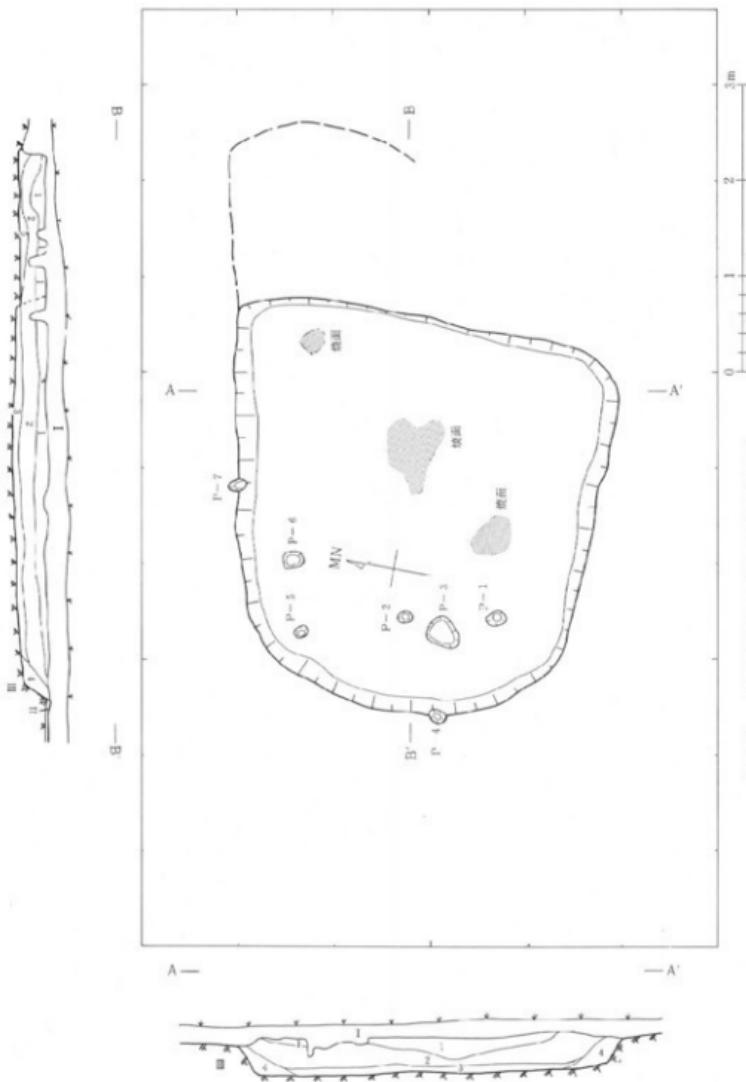
##### 平面形、規模（重複）

確認できた平面形は、東西約4.2m、南北約4mで西側が丸味をもった馬蹄形を呈している。後述するように、堆積および床面で検出された炭化材は、馬蹄形の輪郭の東側の地山面でも検出されている。馬蹄形の輪郭の東側部分は、大部分が攪乱のためII層は認められず、遺構の輪郭を示す溝、壁等を確認する事ができなかった。しかしながら、馬蹄形の遺構内で認められた堆積土と、その東側の層は極めて類似している。馬蹄形遺構の東壁上では、その違いは確認できなかつたが類似した層は東壁より更に東側へ1.8m延びている。これらの事から、(1)馬蹄形の竪穴住居跡とその東側に、前者と重複するようにもう一つの遺構が存在するのか、(2)1軒の竪穴住居跡で、馬蹄形部分の東側がベット状になっているもの、という2つの場合が考えられるが、いずれとも判断する事はできなかった。したがって、以下で竪穴住居跡とは、馬蹄形の遺構だけの部分について指し、その部分について記述する。

##### 堆積土

4層認められた。

第8図 上ノ原A遺跡の発掘区と壁穴生層跡



第1層 にぶい暗褐色(10YR 4/2)シルト層。住居跡の全体を覆っている。

第2層 暗褐色(10YR 3/4)シルト層。炭化物、焼土を含む。

第3層 黒褐色(10YR 3/2)シルト層。黄褐色ロームを粒状に含む。住居跡床面に堆積。

第4層 暗褐色(10YR 3/4)シルト層。

第5層 褐色(10YR 4/6)シルト層。炭化物を含む。住居跡の東側部分にのみ堆積している。

これらの各層は、層の堆積状況などから見て、住居廃絶後に自然に流入したものと思われる。

#### 壁

確認できた壁の高さは、南、北、西壁で約20~10cm、東壁で約2cmである。その立ち上がり角度は比較的ゆるい。

#### 床面

地山まで掘り込んで床面としており、貼床などは認められない。床面は、ほぼ平坦で堅い。尚、堆積土3、4層および床面上から後述する炭化材が検出されている。

#### 柱穴

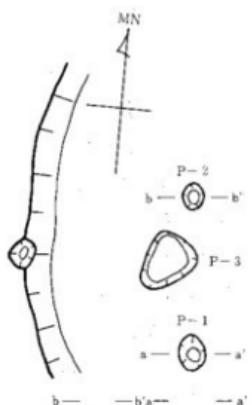
床面からピット5個、北壁から1個、西壁から1個の計7個が検出されている。このうち、P1が20cm、P2は30cmの深さで、共に14~15cmの柱痕跡を確認した。P6は深さ約20cm、P3、P5は深さ約5cmと極端に浅い。P3、P5を除く各ピットは、本住居跡に伴う木、支柱穴ピットと見たい。その組合せについては、住居跡東半にピットが発見されないため、明らかにしえない。

#### 炉

床面上の3箇所で焼面が検出されている。これらが、炉として使用された可能性がある。

#### 年代決定資料

堆積土3層上面からつぶれた状態で出土した土器がある(第20図No.3土器)。その一部は床面上にのっている。この土器は、住居が廃絶された後、あまり時間を隔てないで発見されたものと思われる。



Pit上面は  
基準線bb'より下  
103cm

Pit上面は  
基準線aa'より下  
104cm

第9図 ピット断面図

## 2. 炭化材

竪穴内部から極めて保存の良い炭化材が発見された。從来、火災焼失家屋の炭化材については、余り深く追求される事がなかったように思う。従って、比較、参考とすべき文献も「登呂」<sup>註1)</sup>、本編や「平出」<sup>註2)</sup>を参考としたにすぎず、本節の記述に少なからず独断、誤りがあるだろう。この点について、諸賢の御指導を乞う次第である。

### 炭化材の遺存

竪穴住居床面及び堆積土中に存在した炭化材は、何故遺存したのであろうか。通常の遺跡、ことに上ノ原A遺跡の様な高標な地域、酸性の土壤中では、木質自体は腐食して残りえない。

木質のまま遺存するのは、低温地性の遺跡、泥炭遺跡の場合にはほぼ限定される。木材が、通常の遺跡に遺存しえる条件は、炭化、焼焼された場合であり、竪穴の場合には住居の火災によりその構築材が炭化、遺存したものと見て差し支えない。上ノ原A遺跡の住居跡も火災により焼失した事は、床面が全体に焼けている事や、炭化材の周辺に堆積する焼土の存在等からも明白である。

尚、本住居跡火災の火元は、炭化材の焼け具合、焼土の遺存状態から見て、炭化材B群⑤(後述)の中央部付近であろうと推測している。

炭化材は、最初、埋土1層を剥いだ段階で竪穴の東、西壁に現れた。A、C群(群についての後述)がそれで壁際から竪穴中央に向かって、約40~50度前後の急傾斜で落ちている。A、C群の下部、竪穴床面に密着してB、D群が現れた。B群は、西壁下部から竪穴中央にかけて長径2m、短径1.3mの範囲にかなりまとまり良く遺存する。D群は、東壁下部からわずかに離れ、部分的に途切れ気味になる事もあるが長径2.5m、短径1.5mの範囲に収まる。

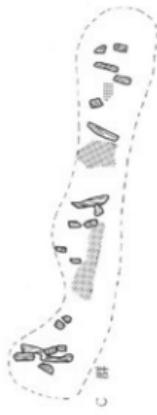
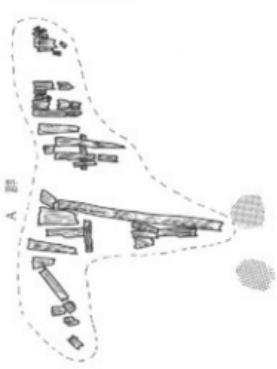
以下、炭化材の出土レベル、そのまとまり具合からA~E群に分割して詳述する。

A群 竪穴の西壁上部から、竪穴内部に40~50度の急傾斜で落ちる狭長の並列する板材10枚数枚によって構成される。木材は、幅5~6cmのものにはば統一され、



第II図 炭化材A群

T



L

第10圖 上ノ原A道跡炭化材出土状況測図



第10圖 上ノ原八通跡炭化材出土状況測図



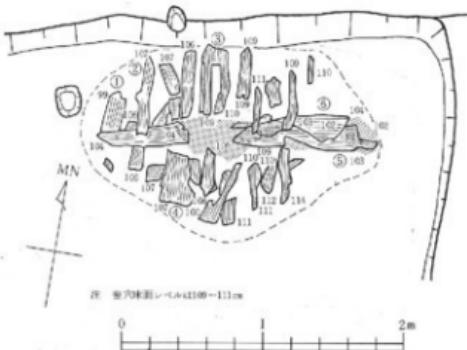
10cm前後のものが1点ある。長さは、1.3mを越すものがあり、これらの縦材はいずれも長さ1.5mを越えるものであったと考えられる。縦材に直交する幅約4cmの横材が1本通る。

**B群** 竪穴の西壁下部から、中央部に向けて遺存する縦材10、横材2から構成される。縦材は、幅4~24cmまであり、通常7~8cm、長さは1mを越えるものはない。縦材①、②は、共に上部を柄に削り、横材に埋ませている。③は、幅広の削板材で中央に削り取り加工を行った痕跡が認められる。横材は、最大幅16cm、

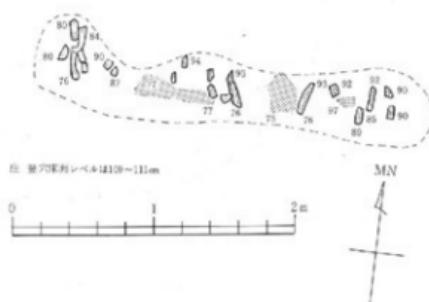
厚さ3cm以上、長さ約2mのもの⑤と、それより短い⑥の2枚の削板材が重なって出土した。横材⑤⑥の中央部は欠失して焼土が盛り上っており、前述した様にこの部分が最も火熱を強く受けた部分であり、本住居火災の火元であった可能性が強い。本群は、②の丸太材を除いて削板材が多数を占めている。

**C群** 竪穴東壁上部から、竪穴内部に向けて約50~60度の急傾斜で落ち込む狭長の板材若干からなっている。恐らくA群と同一の形態、構成を呈するものと考えられるが、遺存状態が悪く、明確にしえない。

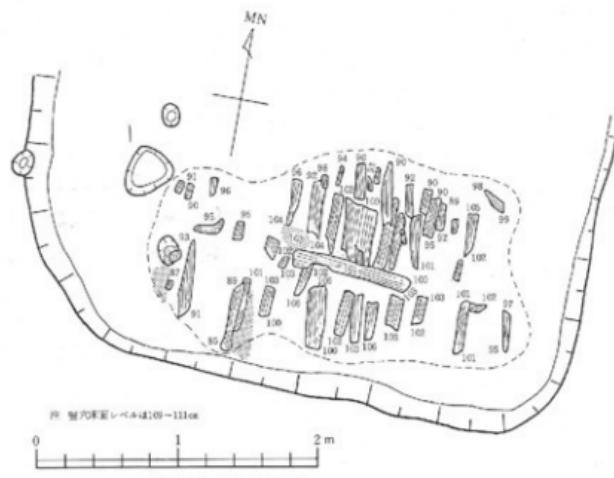
**D群** C群の下部、竪穴の中央部寄りに発見された縦材10余、横材1によって構成される。縦材は、幅7~8cmのものが多く、本群のはば中央寄り、B群④と対応する位置に幅約24cmの幅広のものが1点入る。縦材は、いずれも東壁から直角に竪穴中央部に向いているものを基本とする。横材は、縦材のはば中央部に直交してあり、縦材の上部に



第12図 炭化材B群



第13図 炭化材C群

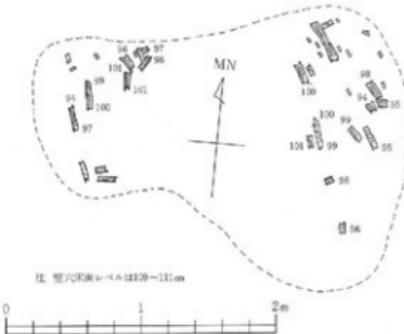


第14図 炭化材D群

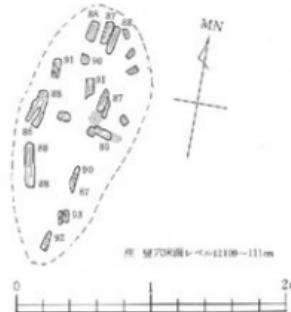
重なる状態で出土した。材は、丸太材と認定できるものはなく、恐らくB群同様、幅3cm以上の割板材が大勢を占めると思われる。

E群 竪穴西壁からはみ出し、その延長線上の内側に遺存する小片からなっている。材は、いずれも幅4~5cm、長さ10~30cm内外の小片となって、不定方向で出土する。木材片の周囲には、木炭小片と焼土が、かなり認められた。出土レベルはB群より約10cm程高い。

F群 E群とほぼ対応する位置にあり、出土レベルもほぼ同じである。炭化材は、幅5~6cm、長さ10~30cm内外の小片からなり、方向は一定しないが壁に直交するのが基本的出土位置



第15図 炭化材E群



第16図 炭化材F群

であった事が推定できる。

以上、炭化材をA～F群に分けて記述した。これを整理すると、以下のような事が言えよう。

1. 炭化材は、大きく2群に分類できる。木材の大きさ、出土レベル、配列等から考えて、B、D群が落ち、A、C、E、F群はその後に落ちた事が言える。E、F群については、別の遺構に伴なうものと考える事もできる。

2. B、D群は、形態、遺材、規模等から見て、極めて近似した様相を呈し、恐らく両群は対応する関係にあったと思う。A、C群も又、上記の理由から対応関係にあったと推定して間違いないであろう。

3. 遺材は、少數の丸太材と、厚めの割板材とからなっている。特に割板材は、かなり年数を経た木材を使用したものある事が判明している((付) C-14年代について)。

さて、これらの炭化木材は、一体何に使われたのであろうか。先に述べた諸点から、この竪穴住居と密接な関係にあった事は容認されよう。とすれば、前述の如き木材群を必要とするのは、住居の構築材と見るのが最も妥当な見解であろう。住居の構築材とすれば、床材、板壁材、板葺屋根材、屋根組材等の場合が考えられる。

(1) 炭化材は、その下面が良く焼けており、炭化材の下部に地床炉が存在する事から、床は板敷ではなく、土間であったと考えられる。

(2) 屋根組材であれば、縦材がこれ程密接して並ぶのに横材が少なすぎる。又、B群⑤、⑥を棟木とした場合、その下に囁ませたB群①、②の解釈がつかない。

(3) 屋根板材とすれば、厚さ3cm以上の割板材では、屋根に相当の重量がかかり、下部構造をよほどしっかりしなければならない。又、屋根板を受ける木舞様の材が見られない。ちなみに、登呂1-49住居跡でも木住居跡と近似した板材群が発見され、報告者は、板葺屋根材と推定している。板材は、幅20-30cm、厚さ1cm程度で羽重ねの状態で出土。板材下部に5-6cmの横棟が通る。秋田・臨本小谷地遺跡の埋没家屋に見られる家屋遺材の内、屋根板材は、幅15-25cm、厚さ2-3cm、長さ約2m前後と推定される。その上を杉皮で覆っている。臨本小谷地遺跡の埋没家屋は、平安時代に比定されており、上ノ原A遺跡とはかなりの年代差があるが、板材の幅や厚さは似ている。しかし、参考とした2遺跡は、いずれも木質で遺存している。上ノ原A遺跡の場合は炭化して残ったもので、焼きしまり、炭化しえないで腐朽した部分、その他を考慮すると、現存の数値にかなりのプラスαが見込まれる。

(4) 土壁をおさえる板材であれば、炭化材の上面又は下面に相当量の焼け土が認められねばならない。又、土壁の芯に用いられた場合には、両面にその痕跡が認められなければならない。

炭化材下面是、竪穴床面に直接しており、その上面にはある程度の焼土が認められたが、発

掘時の所見では、少なくとも炭化材を被覆するような状態では出土していない。

以上、炭化材について、その配列、組み方、材の大きさ、焼け方等の点からその用途について考察した。その結果、板壁材であろうと考えるにいたった。その根拠は次の通りである。つまり、縦材がいずれも壁際から豊穴中央部に向いて直角に倒れており、しかも、その間隔が密接している事は戸板材、板壁材両方の可能性あるも、(3)の理由から板壁材とするのが最も適している様に見受けられる。又、横材は板壁材の押さえと考えるのに不都合はない。一方、B群⑤、⑥とB群①、②の噛ませ具合も、疊面を平らにするという点で解釈がつく。

この他、2~3の解決のつかない問題がある。それは1つに、B、D群の上部にはほぼ併行して遺存するA、C群をどう見るかという事である（これについては、樋木を見る考え方もかなり有力ではあるが）。2つにはB、D群を板壁材とした場合、上部構造が検出されないのは何故かという事である。又、その構造はどの様なものであったのか等の問題がある。後者に対する1つの理解として、炭化して残った他の木材は、炭化、焼焼しえずに腐朽してしまったか、或いは、後世の攪乱によって失われた事等があげられる。

#### 註

1. 関野克「第九章 住居跡と倉庫跡との建築学的考察」『登呂 本編』日本考古学協会編 1978
2. 永井辰男「秋田の埋没家屋」『日本古代文化の探求一家』社会思想社 1975
3. 前掲 註1
4. 前掲 註2

## IV 出土遺物

### 1. 遺物の出土状況

発掘区における遺物の出土は、竪穴の堆積土中にはば限定される。竪穴の層序関係について前述したが、この内、遺物は1層上部、2層下部、3層から出土し、1層上部出土遺物が最も多い。ここで層序について若干の補足を加える必要がある。

1層は、全体的にボサボサしたにぶい暗褐色土であるが、部分的に荒砂を含む堅い暗褐色砂質土層が認められた。この層は、竪穴の西側の一部にのみ確認され、遺物の最も多出する地点と一致する。恐らく、後述する遺物の投棄となんらかの因果関係にあったものと考えられる。尚、本層は、縦、横2本のセクションベルトにもかかわらず、当初後世の擾乱部分と見なしたため、その範囲を明確にする事ができなかった(第17図)。

遺物は、竪穴の西側部分に集中的に発見されたが、無秩序に散乱するのではなく、ある種のまとまりをもって分布する傾向が認められた。遺物の取り上げに当っては、そのまとまりの状態、レベル、層位等から6つのグループに分けた。

4-1、4-2、4-3、4-4群の各グループは、1層上部に分布し、多量の土器と石器類を含む。石器類は、本遺跡出土の大部分を占める。4-1群は、北西から南東方向へ、4-2群もほぼ同じ方向に傾斜し、4-3群は南西から北東方向に、4-4群は北西から南東方向に、それぞれ傾斜を示す。特に、4-3群はかなり傾斜角度がきつく、約40度前後の傾斜角度を示す。

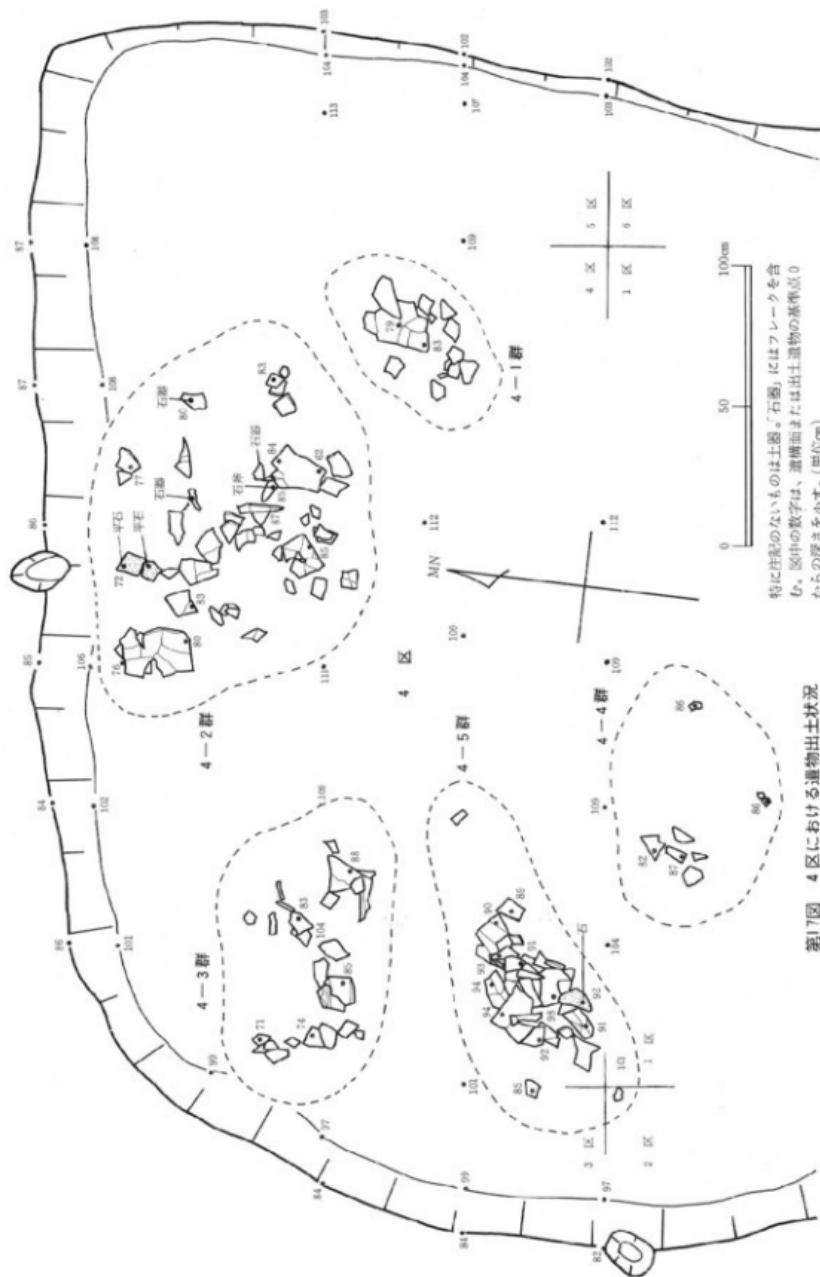
4-1~4-4の各群は、以上の傾斜方向、角度から見て、いずれも住居跡の北西~南北側から投棄された事が推定できる。

4-5群は、前記4群を取り上げた後に発見されたもので、2層下部に平面的に分布し、傾斜は、ほとんど認められない。4-5群の直下に検出された4-6群は、4-5群と同一個体の土器片によって構成され、しかも、その下面是竪穴床面にほぼ接している。4-5、4-6群は、恐らく同時に投棄されたものが、一方が霜上作用によって浮土したものか、或いは、何らかの理由で一方が沈下したかのどちらかであろう。

出土した遺物は、いずれも炭化材の上面に乗っている。

以上の事から、本住居跡出土遺物は、住居廃絶後、時間を異にして2度に亘って投棄された事が考えられる。

今回の発掘調査で出土した遺物は、ミカン箱で約4箱分である。それに加えて、床面の炭



第17図 4区における遺物出土状況

化材若干と、米又は穀類検出の目的で、土壤サンプルを肥料袋で5袋程度採取した。更に、昭和50年秋、三塚によって採集された遺物も、復原整理の段階でこれに加えた。

出土遺物は、土器が大部分を占め、石器類が僅かに伴なう。尚、採取した土壤サンプルを水洗いして観察したが、米を始めとする穀類、堅果等の植物遺体は発見できなかった。

## 2. 土器

出土土器及び、三塚採集土器の大半は接合され、その結果、8個の復原完形又は半欠品を得た。残余の破片はわずかで、拓影に示したのが有文土器のすべてである。

発掘で出土した土器は、後述するように、いずれも所謂天王山式系土器の範囲内で把える事ができる。発掘前の表探によって、内黒の土師器と思われる小片が1点、採集されている。

### 土器の製作

土器の製作技法について知り得る資料は少ないが、2~3の事例によると、内面に1~1.5cm幅で粘土の接合痕の見られる例（第22図拓8）や、第18図No.1土器は、部分的に4~5cm幅で割れている部分があり、ともに粘土積上げの痕跡を示すものと思われる。但し、第21図—5 No.8土器の如き、小形の土器にあっては、手捏ねでも充分事足りたろうと思われる。

土器表、裏面の調整は、表面では調整後に模様、繩文が施される為、観察不能の場合が多いが、大体磨きによって調整されている。小形の土器、又は、器体の無文部分が研磨される場合がある。内面は、比較的調整痕をとどめ易く、その大半に横位の擦痕が観察される。拓8例は、幅約2.7cmの木質ヘラ状工具によって行なわれた事が知られる。内面に見られる擦痕の調整痕の大部分は、同種の工具によって行なわれた事が推測される。又、ヘラミガキされるものも多い。

器形は、3%から9%まであり、4~6%が大部分を占める。器高50cmを越える人形土器にあっても、5~6%と、中、小形土器とそれほど変わらない。

色調（外側）褐色、明褐色、黒色、黒褐色を呈する。

（内側）褐色、白褐色、褐灰色、黒色等を呈する。

（断面）褐色、明褐色、赤褐色、黒褐色等を呈するものが多い。

内、外面に比べて、むしろ断面が判かるい色調を呈する例が存在する。この相違は、器内への炭化物の付着が大きく原因している。

焼成は、2~3の例を除いて比較的良好で、堅い。

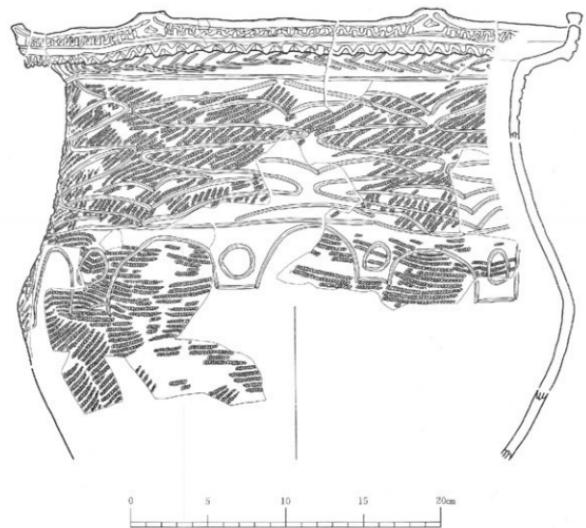
胎土は硝石その他の中砂を多量に混入するものが大部分で、細砂を混入するもの、或いは繩文晩期に見る如き、水漉しの粘土を使用した例はない。



第6図 上ノ原八幡神社土器実測図(1) No. 1 土器



第19図 上ノ原A道跡土器実測図(II) No. 2 土器



第20図 上ノ原A道跡土器実測図(III) No. 3 土器

次に、個々の土器について説明を加える。尚、出土資料が少ない為、図化できたものは「No.」の後に土器番号をつけ、撮影に示した破片は「拓」の後に破片番号を付した。

#### No. 1 土器（第18回）

胴長の大形壺である。口縁は短く立ち、頸部から胴部中位にかけてゆるやかに広がり、そこから、小さな底部まで軟かい曲線ですぼまる。最大径は、器体のほぼ中位にある。

施文は、器面を研磨した後、縄文を回転し、2次文様、或いは縄文施文後の調整は認められない。口縁内側に、かすかな丹彩の痕跡が認められる。

縄文は、口縁上部に幅1cmに亘って右傾斜縄文が巡り、以下底部まで右下りに流れる、いわゆる帶縄文が全面に充填される。縄文は、大体、5条を1単位とする。

底面は、無文平底。口径19.9cm、器高80cm、底径9.8cm、器厚5~7mm。色調、内外面とも褐色~暗褐色（部分的に焼ムラがある）。墨塗は黒色。

#### No. 2 土器（第19回）

口縁が大きく開き、底部の小さな胴長の壺である。頸部文様帶部分から、口縁部にかけてゆるやかに外反する。頸部文様帶下部から胴下部にかけて、やや膨らみを持ちながら下降し、そこから底部にかけて急激にすぼまる。

施文は、口縁部頸部、胴部に分けて行われている。施文順位が、どの部分から行われたかは明らかではない部分もあるが、頸部と胴部については知る事ができる。すなわち、胴部の帶縄文→頸部及び胴部の沈線文→頸部の横位縄文施文という工程が観察できる。以下、口唇部—I a、口縁部—I、頸部—I、胴部—I II IIIに文様帶を区分して記述する。

I a 口縁上には、二叉の山形小突起が2個対となり、全周にはほぼ等間隔で6個配される。突起部を除いた部分には、右傾縄文施文後、右方向から行なわれた刺突文が連続して付けられる。

I 複合口縁を呈し、右傾斜縄文を施文後、口縁中央に2条の平行沈線を巡らし、口縁上端に縱長の刻みが連続して巡り、口縁下端には交互刺突文帯が巡る。

II 線幅7~10%の2条の平行沈線による弧状文によって文様帶が構成される。弧状文は、同心円状に小幅となる三重からなり、稀に最も内側に単線により、もう一重追加される場合がある。弧状文は、上向と下向が交互に配される。文様単元は不規則であるが、下向のものが連續して2つ並び、向かって左の例が右の例に重なっている。これによって、文様帶は時計逆回転で施文された事が知られる。文様帶下限は、2条の平行沈線によって画される。

縄文は、弧状文間に横位に施文される。

III II文様帶下限の横位の平行沈線部分から、底部まで右に流れる縦位の帶縄文が充填される。その上限には、規則正しい上向の連弧文帯が1条巡る。

縄文の条は4条を1束としていると思われるが、基底部分では右傾斜縄文となる。土器表面には、炭化物の付着が認められ、器外面では胴部上半に、器内面では胴部下半に顕著に認められる。

口径 38.5cm、器高 45.3cm、底径 8.6cm、器厚 7.5mm。色調、外面・暗褐色、内面・灰褐色、断面・黒褐色。口縁部、胴部に小範囲に亘る丹彩の痕跡が認められる。

#### No. 3 土器 (第20図)

胴下半を欠失する壺である。頸部は短かく開き、口縁部は更に大きく袋状に開く。胴部は、球状に強く張り出す。下半と、頸部に向かってすばまる上半とに区分できる。

I a 口唇部は平坦に調整され、台形状突起が6個配される。突起部を除いて縄文が回転される。

I b 狹い口縁部は、二重の交互刺突文帯によって構成される。上段の交互刺突文帯は、2本の沈線間を上下から交互に刺突するティビカルな手法で、台形状突起下部には不正台形状のアクセントがつけられる。下段の交互刺突文帯は、上部を沈線で画した後に刺突を加えており、下部は鉗刃状に口縁よりはみ出す。

II 袋状に開く口縁の下部に、太い沈線による横位の羽状文帯が巡る。

III 左傾斜縄文を施文後、太沈線により重層の変形工字文が描かれる。工字文の内部には1~2条のへへ状文が施文される。文様帯は、一応5單元であるがI a 文様帯、III b 文様帯とも対応せず、規則性に乏しい。文様帯の下部には横位の縄文が密接して充填される。その上位には一種の連弧文が巡る。連弧文は振幅が大きく、弧文は横線で連続され、その内部に円文が配される。

III c III a 文様帯の下部には上位の縄文が密接して充填される。その上位には一種の連弧文が巡る。連弧文は振幅が大きく、弧文は横線で連続され、その内部に円文が配される。

口径 36.8cm、現高 29cm、器厚 6mm、色調、外面・黄褐色、内面・黄褐色、断面・黄褐色、器体の約半現存、外面及び内面に炭化物付着。

#### No. 4 土器 (第21図1)

全面に縄文が施文される小形壺。口縁部は丸味を持って立ち、口縁上部には一又する小形の小突起が付加される。突起の下部には、2個の首貫孔が見られる。頸部は大きくなびいて胴部に移行する。胴部は、中央部でやや膨らみ安定した底部へと移行する。

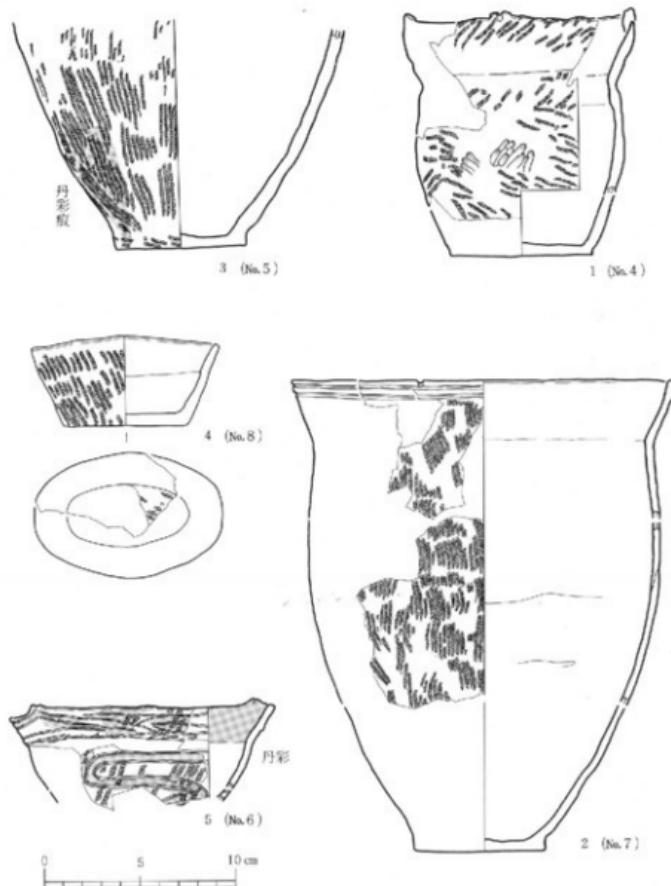
器面調整は、内面では頸部以下、幅 1.5cm の板状工具で縱方向にナデて仕上げている。口縁部と外面頸部付近は、狭いヘラ状工具で横方向に磨いている。外面は、凹凸がはげしく、縄文施文後、更にナデ又は磨きを加えた為、縄文の粒子がつぶれている部分がある。

口径 12.3cm、器高(推定)約 12.5cm、器厚 5~6mm、色調、外面・褐色、内面及び断面は明褐

色、器体の約半分現存。

No. 5土器（第21図3）

甌の胴下部のみ現存する。底部から胴部への立上りはゆるやかで、胴上部から口縁部にかけてはそれ程広がらない中形の甌である。土器内、外面は横ナデによって調整され、外面では現存部に右に流れる継位の帶繩文が充填される。底部附近では右傾斜繩文となる。底面は無文で、外周にタガ状に粘土紐を薄くはりつけ、揚底風を呈する。胎土に、珪石等の中砂を多量に含む。



第21図 上ノ原A遺跡土器実測図IV No.4～No.8土器

現高12.1cm、底径6.8cm、器厚5~6mm、色調、外面・黄褐色~明褐色、内面・暗灰色、外面全体に炭化物が付着し、部分的に丹彩が認められる。

#### No. 6土器（第21図5）

丹彩された小形鉢である。口縁は複合状口縁をなし、右頬繩文施文後、細沈線によって三角形工字文が描かれる。口縁上は小波状口縁となり、頂点に刻みがつけられる。口縁下端には、右方向からの刺突文が時に口縁からみ出してつけられる。脣部から脛部にかけて縦位繩文を地文として、2本線による変形工字文が描かれる。口縁部内、外面と脣部の沈線文様帶中に丹彩が認められる。器内、外面に砂粒が浮き出し、ザラザラした感じを受ける。復原口径14.0cm、器厚3~4mm、色調、外面・褐色、内面・褐色、断面・灰褐色。尚、台付鉢の可能性もある。

#### No. 7土器（第21図2）

脣部と口縁部の境界付近で、わずかに外反するだけの単純な甕である。口唇部には、横位の繩文施文後、一条の沈線を巡らし、所々を縦の小刻文によって切っている。口縁から、恐らく底部付近まで右に流れる帯繩文が密接して充填されていたと思われる。口縁部には、平行する2条の沈線が巡るのみである。復原口径20cm、器厚5mm、色調、外面・褐色、内面・明褐色、断面・黒褐色。

#### No. 8土器（第21図5）

小形の鉢である。口縁上面観は円形ではなく、卵形を呈すると思われる。器内、外面は入念に研磨され、外面に、口唇から1cm程残して底部まで細い縦走繩文が充填される。復元口径は、長径9.8cm、短径6.5cm、器高4.6cm、底部長径6.4cm、器厚4mm、色調、内、外、断面共に橙褐色。

#### 土器破片（第22図1~24）

拓1：強く外反する口縁部で口唇部に縦長の刻みが密に施文され、二又の小突起がつく。口縁は、複合口縁を呈し、下端に交互刺突文帶がめぐる他平行する2条の沈線が観察できるが、他は磨滅が著しく觀察不能。

拓2：複合口縁を呈し、下端に交互刺突文帶が巡る。口縁部には右頬の、脣部には縦位の繩文が施文され、口唇部にも及ぶ。

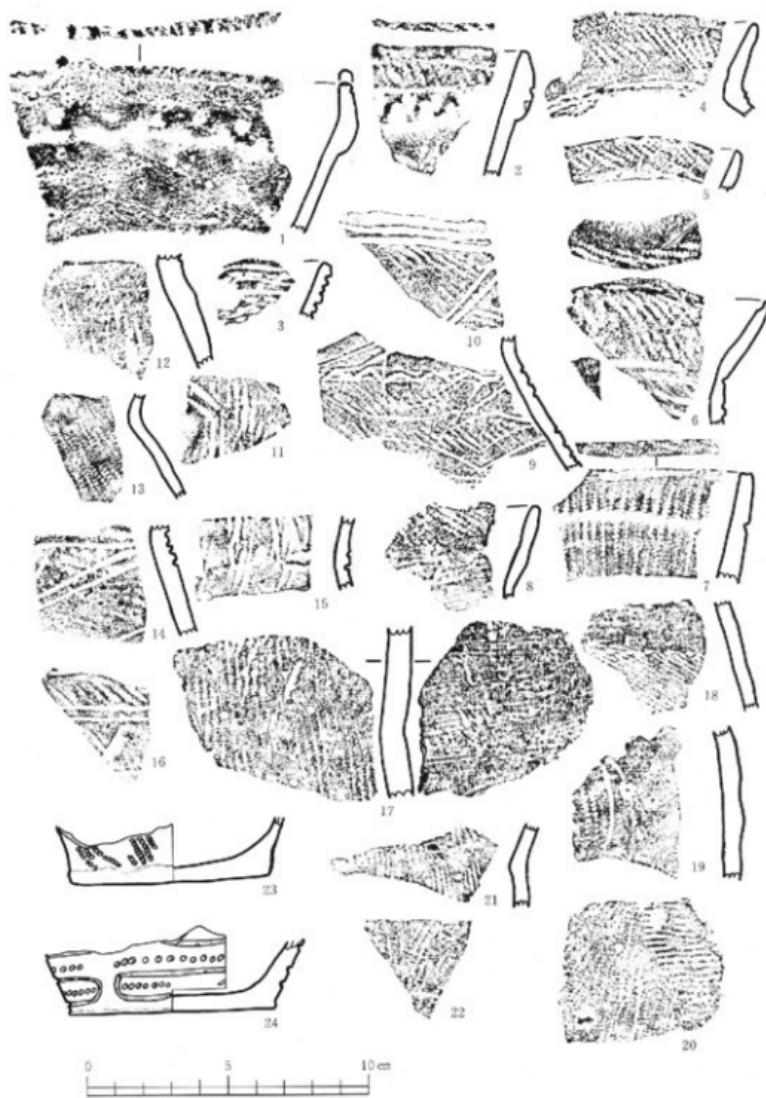
拓3：波状口縁を呈する小片で、3条の平行沈線間に刺突文帶が介入する。

拓4：強く外反する口縁に右傾斜繩文、脣部に横位の平行沈線文がめぐる。

拓5：複合口縁を呈する小片で、右傾斜繩文が施文される。

拓6：脣部から外反する口縁部に右傾斜繩文が、脣部には浅い幅広の工具による横位の平行沈線が数条めぐる。口唇から、内面の口縁上部にも右傾斜繩文が施文される。

拓7：複合口縁を呈し、口縁から体部にかけて縦位繩文が充填される。口唇は平滑に調整さ



第22図 上ノ原A遺跡出土土器拓影

第1表 上ノ原A遺跡出土土器

(a)

整理番号	器種	法量(cm)				色調		出土地 地区一層位	付図番号	図版番号	備考	
		器高	口径	最大径	底径	器厚	外面					
No. 1	人形壺	80.0	19.9	胸 44.0	9.8	0.5 ↓ 0.7	褐色～ 暗褐色	褐色～ 暗褐色	4-1	第18図	7	口縁部に丹彩
No. 2	壺	45.3	38.5	口 38.5	推 8.6	0.75	暗褐色	灰褐色	4-2	第19図	8	口縁部と胸部に 丹彩
No. 3	広口壺	現 29.0	36.8	胸推 35.8	●	0.6	黄褐色	黄褐色	4-3	第20図	9	
No. 4	小形甌	推 12.5	12.3	口 12.3	推 7.5	0.5 ↓ 0.6	褐色	暗褐色	4-1	第21図1	10-1	
No. 5	甌	現 12.1	●	●	7.0	0.5 ↓ 0.6	黄褐色～ 明褐色	暗灰色	4-1	第21図3		部分的に丹彩
No. 6	小形鉢	現 5.4	推 14.0	口 14.0	●	0.3 ↓ 0.4	褐色	褐色	4-1	第21図5	10-2	口付鉢か、丹彩
No. 7	甌	推 25.2	推 20.0	口 20.0	7.0	0.5	褐色	暗褐色	4-1	第21図2		
No. 8	小形鉢	4.6	推 9.8 6.5	口 9.8 6.5	推 6.4 3.4	0.4	暗褐色	暗褐色	4-1	第21図4		

(b)

整理番号	部位	器厚(cm)	色調		出土地 地区一層位	付図番号	図版番号	備考
			外面	内面				
拓1	口縁部	0.6	明褐色	明褐色	4-表土	第22図1	11-1	甌
拓2	口縁部	0.7	暗褐色	暗褐色	4-2	第22図2	2	甌
拓3	口縁部	0.5	褐色	明褐色	1-3	第22図3	3	甌
拓4	口縁部	0.5～0.7	褐色	暗褐色	3-2	第22図4	4	甌
拓5	口縁部	0.5	褐色	暗褐色	4-表土	第22図5	5	甌
拓6	口縁部	0.5～0.6	明褐色	褐色	4-2	第22図6	6	甌
拓7	口縁部	0.6～0.7	暗褐色	褐色	4-表土	第22図7	7	甌
拓8	口縁部	0.5	暗色	褐色	4-1	第22図8	8	甌
拓9	胸部	0.4～0.6	暗褐色	褐色	4-4	第22図9	9	甌
拓10	頸部	0.6～0.7	橙褐色	黄褐色	4-3	第22図10	10	甌
拓11	腹	0.8	黄褐色	黄褐色	1-表土	第22図11	12-11	
拓12	胸部	0.9～1.0	明褐色	明褐色	4-1	第22図12	12	甌
拓13	頭部	0.5	褐色	暗褐色	1-1拓	第22図13	13	
拓14	頭部	0.6	明褐色	暗褐色	1-3	第22図14	14	
拓15	頭部	0.5	明褐色	明褐色	5-表土	第22図15	15	
拓16	頭部	0.6～0.7	褐色	黄褐色	5-4	第22図16	16	
拓17	頭部	0.5～0.8	黄褐色	暗褐色	1-3	第22図17	17	
拓18	頭部	0.6	褐色	暗褐色	1-3	第22図18	18	
拓19	頭部	0.9	橙褐色	暗褐色	1-床面	第22図19	19	
拓20	頭部	0.5	黒褐色	褐色	4-2	第22図20		
拓21	頭部	0.5	暗褐色	褐色	4-2	第22図21	12-20	
拓22	頭部	0.5	暗褐色	褐色	4-2	第22図22		
拓23	頭部	0.4～0.8	褐色	暗褐色	4-表土	第22図23	12-21	
拓24	頭部	0.5～0.9	明褐色	黄褐色	1-4	第22図24	22	

れ、斜行縄文が施文される。

拓8：わずかに肥厚する口唇上部に、幅1cm内外の斜行縄文帯がめぐり、頸部付近は、狭いヘラ状工具によって横位に磨かれる。内面に粘土積上げの痕跡が見られる。

拓9：壺か甕の頸部片で、上部に交互刺突文風の模様帯が見られる。（最初に、平行線を描き、後、断続する小振幅の鉛筆文を描いている）その下部には、細沈線による菱形文風のモチーフが描かれ、後、部分的に縄文が回転される。いわゆる「充填縄文」の手法による。

拓10・11・14～16・19：右頸又は縦位縄文を地文とし、各種の沈線文が描れる胴部分である。

拓12・13・18・21：いずれも頸部又は胴上部破片で、縦位又は右頸斜縄文が見られる。18は頸部が無文となり、縄文帶上段に縄文原体末端の圧痕が見られる。

拓17：比較的厚手で、屈曲する胴部片の表面に縦位縄文が施文される。内面には、幅2.7cmの木質ヘラ状工具による、横位の擦痕状の調整痕が、明瞭に認められる。

拓20：胴部分で、縦位縄文を施文した後、部分的に横位の縄文が施文される。横位縄文は、縦位縄文の欠除した部分に穴埋め的に充填された感じを受ける。縄文原体は異なる。

拓23：底径7cm程の中形土器の底部片。器底部は、やや部厚く張り出し、底面はほぼ平滑に磨かれるが、底面中央でやや凸出し不安定な感じを受ける。表面に、右頸斜縄文が施文される。

拓24：甕又は鉢の底部で、変形工字文風の沈線文が描かれ、その内部に細い竹管状工具による刺突文列が見られる。底面は、平滑に磨かれる。

### 3. 石 器

上ノ原A遺跡の、出土石器の総数は16点である。

内訳は、打製石器13点、磨製石器3点で、他に剥片が18点ある。以下に詳述する。尚、剥片の内、特徴的な2、3について図示し説明を加える。

#### 石錐（第23図1）

綫長で、断面が不整三角形の素材の両側縁に調整剝離を加えて錐としたもの。調整剝離によって、基部付近は台形状を呈し、錐部は不整三角形となる。基部と錐部の中間に、両側からノッチを入れて区画している。

#### スクレーパー

出土石器の大半を占める。形体、製作技法等から次の4類に分類できる。

A類（第23図11）綫長なフレークの両側面に調整加工した半両面加工のタイプでC面中央に稜線が通る。

B類（第23図2・3・4）比較的薄手の二等辺三角形の素材の1側縁に細かい小剝離を加えて刃部としたもの。片面加工に近い。本類の特徴は、

① 母岩から剥離した剝片を、更に割断して二等辺三角形の剝片とする。この場合、剝片の末端部分を主に用いる。

② 割断面は、剥離面とほぼ直角で、調整は行わない。

③ 二等辺三角形の短辺を刃部とする。刃部は最小限度の細かい小剥離によって形成される。

C類（第23図5・6・7・9・10）不定形の小形剝片の一辺に、調整を加えて刃部とするもの。5は不整四辺形の剝片を素材とし、一方の長辺の両面から調整を加えて刃部とする。b面に自然面が残る。6は、比較的薄手の剝片を素材としている。形態、技法は5に近似する。b面に自然面を残し、刃部はつぶれている。7は、小形剝片の最長辺に、わずかな調整を加えて刃部としたもの。一側面に自然面を残す。9は、竜骨状を呈するやや部厚な素材の最長辺に、

第2表 上ノ原A遺跡出土石器

整理番号	種類	石質	大きさ(cm) 長軸×短軸×厚さ	出土層位	付図番号	図版番号	備考
1	雖	頁岩	5.4 × 1.7 × 0.7	I	第23図1	13-1	
2	スクレーパー	頁岩	4.8 × 3.8 × 0.8	I		2	B類
3	タ	瑪瑙	4.4 × 3.2 × 1.2	I		3	タ
4	タ	瑪瑙	5.8 × 4.4 × 1.1	I		4	タ
5	タ	頁岩	4.9 × 3.1 × 1.1	I		5	C類
6	タ	頁岩	3.7 × 3.4 × 0.6	I		6	14-5 タ
7	タ	頁岩	2.9 × 2.4 × 0.5	I		7	タ
8	タ	頁岩	3.9 × 1.7 × 0.8	I		8	
9	タ	鐵石英	6.5 × 3.8 × 1.5	I		9	9 C類
10	タ	鐵石英	— × 4.2 × 0.9	I		10	10 C類 半欠
11	タ	瑪瑙	7.9 × 2.6 × 1.2	I		11	15-11 A類
12	タ	赤瑪瑙				12	12 D類
13	使用痕ある剝片	石英脈岩	8.0 × 3.7 × 1.1	I		13	
14	剝片	白瑪瑙	2.3 × 1.8 × 0.3	I	第24図14	14	ピエス・エスキュー剝片
15	タ	頁岩	4.7 × 1.3 × 1.0	I		15	タ (再利用)
16	タ	頁岩	6.0 × 4.6 × 1.0			16	
17	タ	鐵石英	8.6 × 5.6 × 2.1	I		17	
18	タ	鐵石英	7.8 × 5.5 × 2.2	I		18	16-18
19	磨製石斧	砂岩	10.9 × 4.6 × 3.0	I		19	再利用
20	石皿	花崗岩	(12.8) × (11.8) × 4.9	I	第25図	21	半欠
21	ハンマーストーン	花崗岩	(10.6) × 7.2 × 4.0	I	第24図20	20	半欠 一部に磨面あり

両面から調整を加えて刃部とする。素材は、調整打面から剥取された、横長の剝片である。b面は自然面に近い。10は、破損品で本来は縦長の幅広のスクリーパーであったと思われる。一方の側縁に両面から調整が加えられている。

D類（第23図12）a面中央に棱線があり、横状に広がる刃部に細い調整が加えられた小形のエンドスクリーパーである。尚、左上部にも細かいリタッチが認められる。b面中央は円状の高まりを呈する剝離面をなし、「火ハゼ」現象によって遊離した剝片を素材としている事が知られる。

#### 剝片

18点の出土を見た。内、使用痕の認められるもの、特殊な剝片、大形の剝片等について図示する。

第23図13は、縦長剝片のa面左侧縁に使用痕が認められる。

第23図14は、b面の主要剝離面に打面、バルブが認められず、b面自体がステップフラクチャー面を形成する。

第24図15は、四面柱状体を呈する縦長剝片で、b面は直上から加撃された為、特殊なステップフラクチャー面を形成する。打面、バルブは認められない。b面背面（d面）にも同様の剝離面が認められる。c面には調整剝離が認められるが、調整打面と考えるよりも、エンドスクリーパー等の転用品と考えられる。13、14は共に岡村氏の言うピエス・エスキューの削片であろう。<sup>註1)</sup>

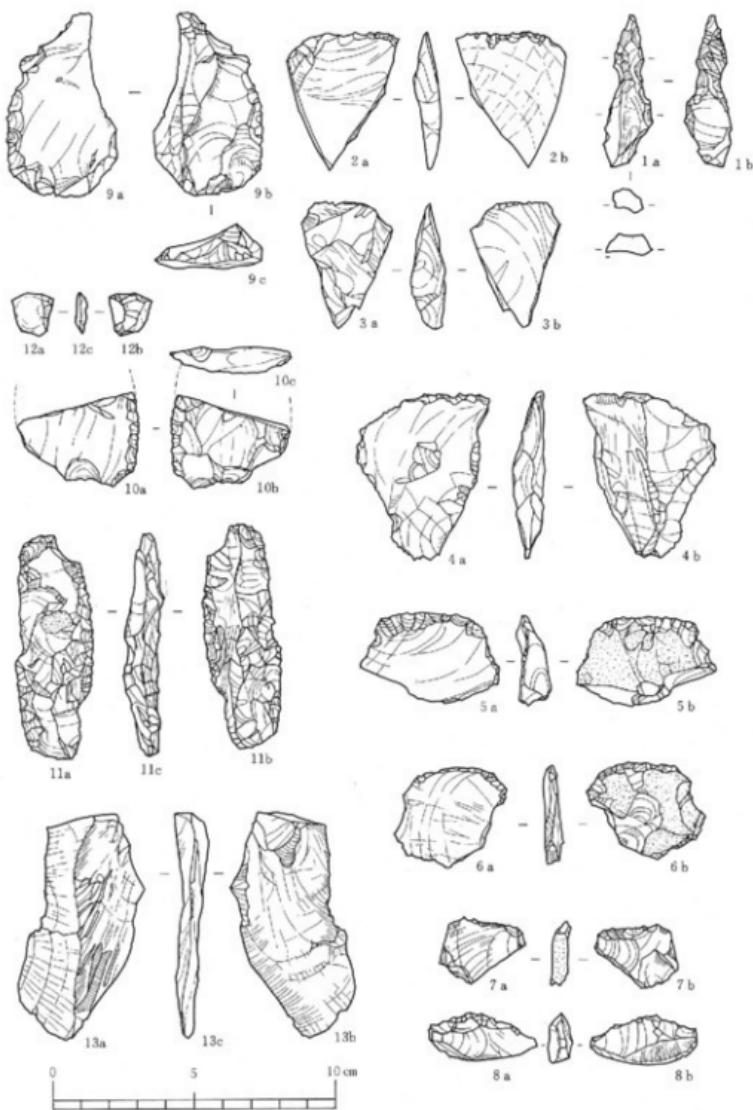
第24図17は、平坦打面を有する石核から剥取された大形剝片で、a面に自然面を残す。

第24図16も、平坦打面を有する石核から剥取された横長の剝片である。

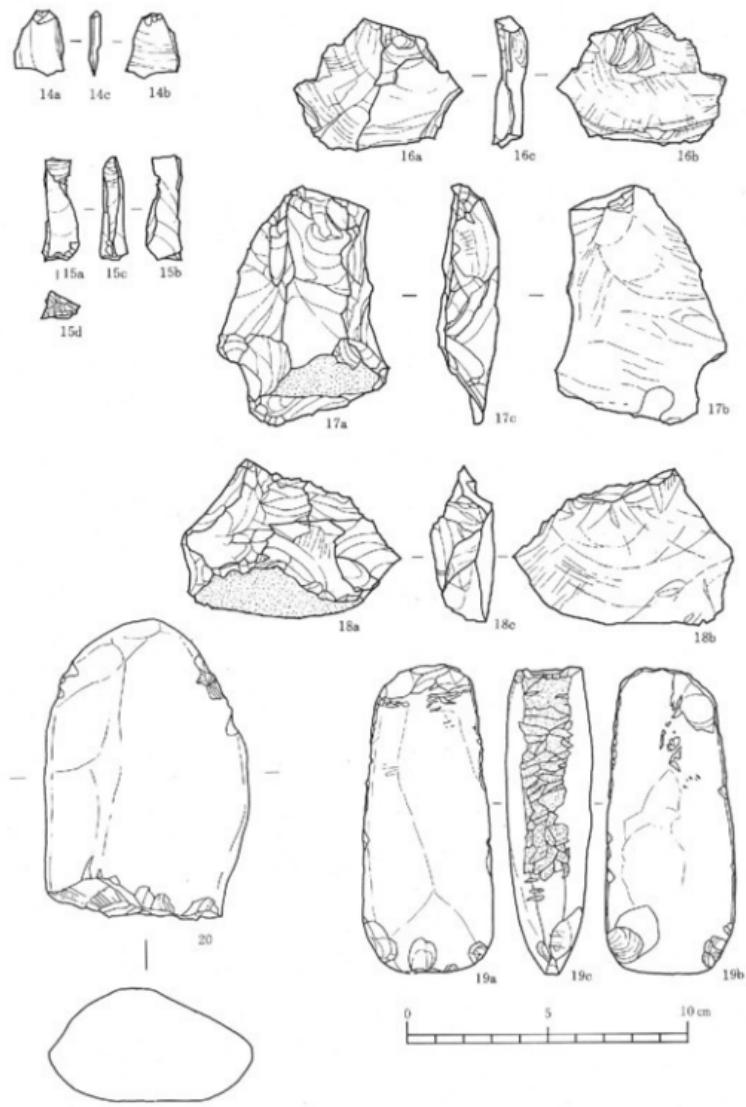
第24図18も、15同様平坦打面の石核から剥取された大形、部厚な剝片である。a面下部に自然面が残る。

#### 磨製石斧（第24図19）

中形の両刃右斧である。器面に、第1次加工の荒割りや第2次加工の敲打整形痕が残り、最終工程の研磨が入念に行われなかった事を示している。本石器において特徴的な事は、両側面に深い横長の敲打痕が連続して残る事と、頭部に、石斧としての使用後に行われた打撃痕が残る事である。側面の横長の敲打痕は、手持ちのハンマーとして再利用された際の痕跡であり、頭部の折損部、及びb面右上端の剝離痕は、上部から直角に加撃された事によって生じたもので、剝離面はステップフラクチャーを残す。刃先の極端な摩耗が、それと因果関係にあったかは明らかでない。側面の敲打面は、頭部の加撃痕によって切られている。従って、本石器は磨製石斧→手持ちハンマー→クサビと再三利用された事が考えられる。



第23図 上ノ原A遺跡出土石器実測図I



第24図 上ノ原A遺跡出土石器実測図III

### 石皿（第25図）

扁平な自然石を利用した石皿。中央に磨面が認められるが、それ程使用された痕跡はない。右側面の破損は使用時、又はその以前に求められ、下方の破損は使用時以降に求められる。

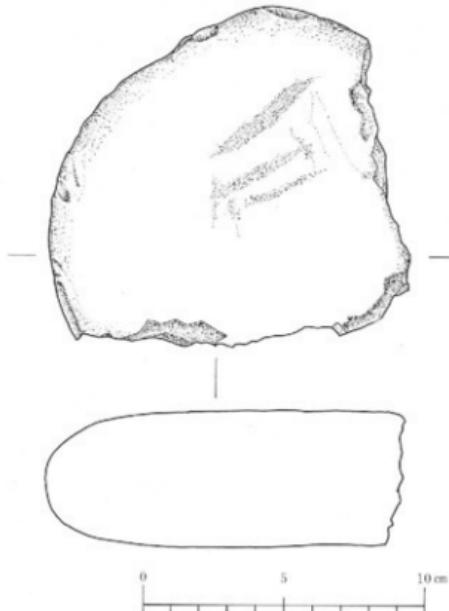
### ハンマーストーン

#### （第24図20）

自然石を利用したハンマーストーンである。両肩部に敲打痕が認められ、背面中央部に磨面が認められる。磨面が現存部一杯に及ぶ事や、破損部の両サイドにも敲打痕が認められる事から下方の破損部は、ハンマーストーンとして使用中折損したものと思われる。尚、磨石として、一時的に機能した事が窺える。

上ノ原A遺跡出土の石器は、以上のように5種8類に分類できる。その内訳は、前述のように石錐、各種スクレーパー、磨製石斧、石皿、ハンマーストーン等で、いずれも縄文時代でも一般的な器種によって構成される。しかし、詳細に観察すると出土石器には次のような特徴が指摘できる。

1. 石器の製作は、一般的な縄文時代の石器に比べて非常にラフな感じを受ける。
2. 石質は、頁岩、メノウ、鉄石英が主体となる。栗原北部地方の縄文晩期後半の石質に近似する傾向がある。
3. 打製石器では、各種スクレーパーが大部分を占める。
4. スクレーパーの一類に、特異な形態、技法を有するものがある。スクレーパーB類がそれで、今後、この種石器の技法、用途、系譜等に留意する必要がある。
5. ピエス・エスキュー削片が確認された。岡村氏によれば、弥生時代の例として青森県顕



第25図 上ノ原A遺跡出土石器実測図

野遺跡（弥生中期）に次いで2例目、最も新しい時期の確認例となる。

#### 註

- 1 関村道雄「ビエス・エスキューについて—岩手県大船渡市葛石遺跡出土資料を中心として」『東北考古学の諸問題』1976。尚、ビエス・エスキューの機能について「何かを削る為の楔と考えられる。たとえば骨角器製作のために素材を縦割りにしたり、石器製作時に母岩から適当な大きさの素材をえるなどが予想される」としている。

## V 考 察

### I. 天王山式期の住居跡をめぐって

#### 天王山式期の住居跡

從来、天王山式期の住居跡として、次の4遺跡が知られている。

新潟県村山市滝ノ前遺跡	3軒	1
福島県須賀川市弥六内遺跡	1軒	2
福島県郡見町仏供田遺跡	1軒	3
岩手県水沢市常盤広町遺跡	1軒	4

以下、各住居跡について概説する。

#### 滝ノ前遺跡

滝ノ前遺跡は三面川が日本海に注ぎ出る河口の右岸段丘に形成され、遺跡は、その段丘先端部に南面し、標高は42mである。景勝、軍防、山海の利等の自然条件に恵まれた地域である。

遺跡は県道の付帯工事によって発見され、緊急調査によって3棟の住居跡が発見された。

##### (1号住居)

1/3程が残存する円形プラン竪穴住居で、直径5m前後と推定される。壁はロームを30cm程切り込んで作られ、周溝がある。柱穴は径35cmのものが中央寄りに3個検出された。

##### (2号住居)

プランは、ほぼ正円形で径5.65m～5.50mで周溝幅は30cm前後、深さ平均10cm、中央東寄りに地床炉が検出された。周溝中には径15cmの浅いビットが配列されている。柱穴は径約30cm前後のものが不規則ながら南北線に跨3列にならんでいる。

##### (3号住居)

プランは径5.35m～5.15mのほぼ正円形で、周溝が全周する。周溝幅は30～35cmで幅広く、深さも20cm以上に及ぶものがある。住居跡北側に1.3m×1mの方形の張出し部がつく。柱穴は、径25cm前後、深さ30～40cmでほぼ3列に配列されている。周溝中には、ほぼ対角の位置に4個の柱穴が認められる。炉は確認されなかった。

2号住居、3号住居とともに、ローム面を切り込んで壁を作り出す竪穴住居ではなく、ローム面を幅広の周溝で囲み住居を区画した。いわゆる平地式住居に属する。

住居の堆积土中からは、須恵器、土師器(和泉式)、弥生終末期の千種式等がわずかに出土し、出土量の90%は弥生式土器である。その大部分が天王山式上器で、小量の畿内系の上器が伴なう。1号住居のビット、3号住居の周溝や床面から大王山式土器が出土していることからして、

住居跡は3例共に天王山式期に属することが確認された。

#### 弥六内遺跡

須賀川市史に記録がある。報告者によると、隅丸方形の竪穴が検出され、天王山式土器が発見された事により、天王山期の住居跡とされたが、第3者の談話によると、出土土器そのものは、天王山式土器と見なし得るが、竪穴住居跡との関連は明確に把えられていないともいう。

#### 仏供田遺跡

遺跡は、信達盆地北端部の低地洪積平野に立地している。遺構は、圃場整備事業に先立ち、同地区一帯に遺存する条里製造構調査の際発見された竪穴住居跡1棟である。

住居跡は長径3.25m、短径2.85mの不整円形プランで、壁の立ち上りは4~10cmと低く、住居跡埋土は単層である。埋土中から土器片30数片とフレイク1点が出土した。土器は、いずれも天王山式土器である。

#### 常盤広町遺跡

遺跡は、北上川西岸の洪積平野に立地し、河流からわずか1km距離で立地しているにすぎない。

伊東信雄氏によって調査が行われ、竪穴1棟が検出された。竪穴は、東西3.2m、南北2.5mの隅丸長方形のプランで、地山に40~45cm切り込んで作られている。

床面は堅く、壁の直下に幅10cm、深さ15cmの周溝が巡る。炉、柱穴は見られない。

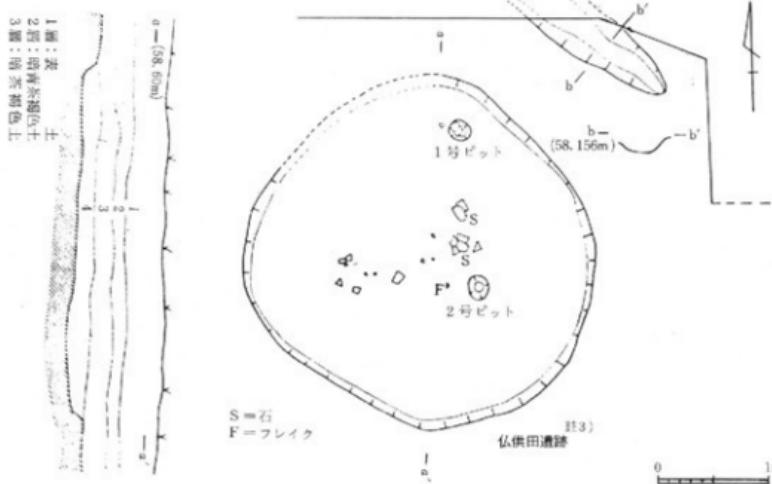
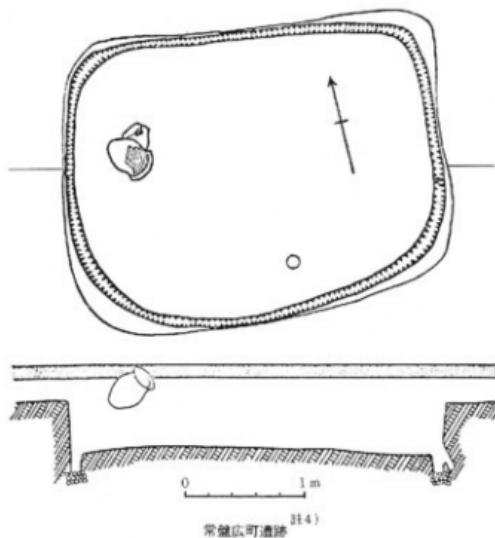
遺物はいずれも床面から浮いて出土した。出土遺物には、多量の土器、鐵17点、細形管玉25点、ガラス製小玉2点がある。土器は、ほぼ完形を行するものが4個発見され、うち2個は、合口の状態で出土し、他の一点には底部穿孔が認められる。伊東氏は、これも合口壺の片割れではなかったかと推定されている。

以上のように、出土遺物及び出土状態から推して、本例は極めて墓壙的性格が強いと考えられる。私は、合口の状態で出土したと推定される土器が、いずれも竪穴上面に浮いている河原石群の上部に存在したという点を重視し、竪穴は当初、住居として構築され、後廃されて墓地に転用された際、この河原石群が置かれたものと解したい。それは北海道の縄文~統繩文時代の、墓壙に見られるように、墓壙底にベニガラをふりまく、或いは墓壙上に集石を配する事等と同じ意味をもつ禁忌的性格のものであろうと推測している。

天王山式期の既知の住居跡について概述した。一応ここで整理してみると、

④ 住居の構築は、住居構築面を掘り凹めて区画する竪穴式住居と、周囲に周溝を巡らして住居空間を区画する平地式住居の両者がある。後者は、竪穴前遺跡の2例のみで、他はいずれも竪穴式住居である。

周溝は竪穴前の3例と、常盤広町例に認められる。



第26図 天王山式期の竪穴住居跡例

⑤ 住居のプラン 滝ノ前遺跡の3棟、佐供田例が円形プラン、常盤広町、弥六内例は長方形又は隅丸方形プランである。滝ノ前例は、天王山式期の複数の住居跡が発見された唯一の例であるが、発見された3棟がいずれもほぼ正円形を呈している事は、それが仮に滝ノ前遺跡、或いは、新潟北部にのみ特有な特徴かは知らないが、或る種の傾向として把握することはできよう。

⑥ 柱穴及び炉 滝ノ前3例には、明瞭な柱穴が存在するが、常盤広町、佐供田例には遺存しない。炉は、滝ノ前2号住居に地床炉が認められる。他は不明もしくは認められない。尚、<sup>註5)</sup>ここで藤田氏の記述により、天王山遺跡の炉と思われる遺構についてふれておく。

「山頂南端部から0.9m×1.0mの略円形規模で16個の河原石が巡り、右側の中は最深27cmの灰層であった。これより東0.8mの地点では、径0.7mの範囲に灰層があり、その上に焼けた白河石が集積された個所があり、集石下部にも薄く灰層が残っていた…………。」

以上:の藤田氏の記述及び略図から、前者は石團炉、後者は集積炉?であろうと想定される。藤田氏による天王山遺跡の第1期発掘調査は、1地点が1m或いは2m四方といった試掘程度の発掘であった為、本来、竪穴あるいは平地式の住居跡であったものを確認できなかったのではないかと思われる。

第3表 東北地方の弥生時代住居跡一覧

遺跡名	時期	平面プラン	大きさ(m)	面積(m)	柱穴	異端	如	その他の
山形・地蔵池	垂森	円形か	4~5	約15.5	10数個 円形にめぐる ほほ門形に 6個 竪穴の外周に 17個	な	し 不明	半地式か
福島・伊勢林前2号	櫛森	略円形		12.5		な	し 地床炉(東側)	半地式
岩手・長谷洞	例	円形	3.1×3.3	7.3		な	し 石圓炉(円形)	
宮城・十三塚	桜井	不整円形?						
岩手・常盤広町	天王山	隅丸長方形	3.2×2.5	8	な	し	ありなし	床面に朱
宮城・上ノ原A	天王山	馬蹄形	4.2×4.0	約16	床面3、壁面2	な	し 地床炉	良好な炭化木材
福島・佐供田	天王山	不整円形	3.2×2.8	約7	な	し	な	なし
・・・弥六内	天王山?	隅丸方形						
新潟・滝ノ前1号	天王山	円形	4.2(+)a	17以上	3(+a)	あ	り 不明	
・・・2号	大土山	円形	5.5×5.6	約23.4	多数(範囲3例) (約11m)	あり	地床炉	半地式
・・・3号	天王山	円形	5.3×5.1	約20.9	多数(範囲1) (約10m)	あり	なし	半地式、張り出し窓あり
福島・伊勢林前26号	磐船山	不整方形	(3.0)×3.0	(9)	不 明	な	し 不明	
・・・大原C 1号	磐船山	隅丸方形	4.0×3.4	13.6	主柱6、支柱2		地床炉(壁1)	
・・・2号	磐船山	隅丸長方形	4.4×2.7	11.9	2(+a)			
・・・輪山 1号	磐船山	隅丸長方形	5.0×3.8	19		な	し 地床炉3	
・・・2号	磐船山	隅丸長方形	5.0×2.2	11		な	し	
・・・3号	磐船山	不整方形	3.3×3.3	11				なし

(天王山式跡のみ新潟県まで含めた) (出典は54ページ文献を参照の事)

## 東日本の弥生後期住居跡

和島氏によれば「関東地方の住居プランは、久ヶ原期→弥生町期→前野町期とわたる発展の過程に応じて、小判形、胴張隅丸方形からさらに隅丸方形への変遷を大勢とする」と指摘されている。<sup>註6)</sup>縄文時代の竪穴住居は円形プランを呈するものが圧倒的に多く、古墳前期になると、方形又は隅丸方形にプランが漸一化されていく事は周知の事である。関東地方では、弥生中期前半の須和田式期に既に方形化の傾向がうかがえる。宮ノ台式期になると、例えば千葉県市原市大鹿遺跡では、宮ノ台式期の竪穴住居36軒の内、1軒のみ円形プランで、他はすべて方形プランを基調とする（楕円形、隅丸方形を含む）。しかも、方形プランの例がいずれも、壁溝、柱穴、炉、貯蔵穴等によって構成される。柱穴はほぼ対角線上の4か所に穿たれるのに対し、前者は規模も小さく、壁溝、貯蔵穴も認められず、ビットはあるが、柱穴とは認められない等、後者に比べて著しく見おとりがする。<sup>註7)</sup>

又、北関東の茨城県大洗町長峯遺跡では、磐船山式、十王台式期の住居跡17軒が発掘され、内、円形プランは1軒のみで、他はいずれも方形を基調とする。一般的な内部構造は、ほぼ対角線上に4個の主柱穴を配し、竪穴中央部に地床炉を行するタイプで、稀に壁柱穴を伴なう例、貯蔵穴、周溝を伴なう例がある。<sup>註8)</sup>

以上の具体例及び他の諸遺跡の知見から、少なくとも、関東地方では、弥生中期以降、竪穴住居の平面形が円形プランを主体とする集落の存在は確認されていない。中部地方でも、後期初頭には、関東地方と同様の傾向を示している。<sup>註9)</sup>

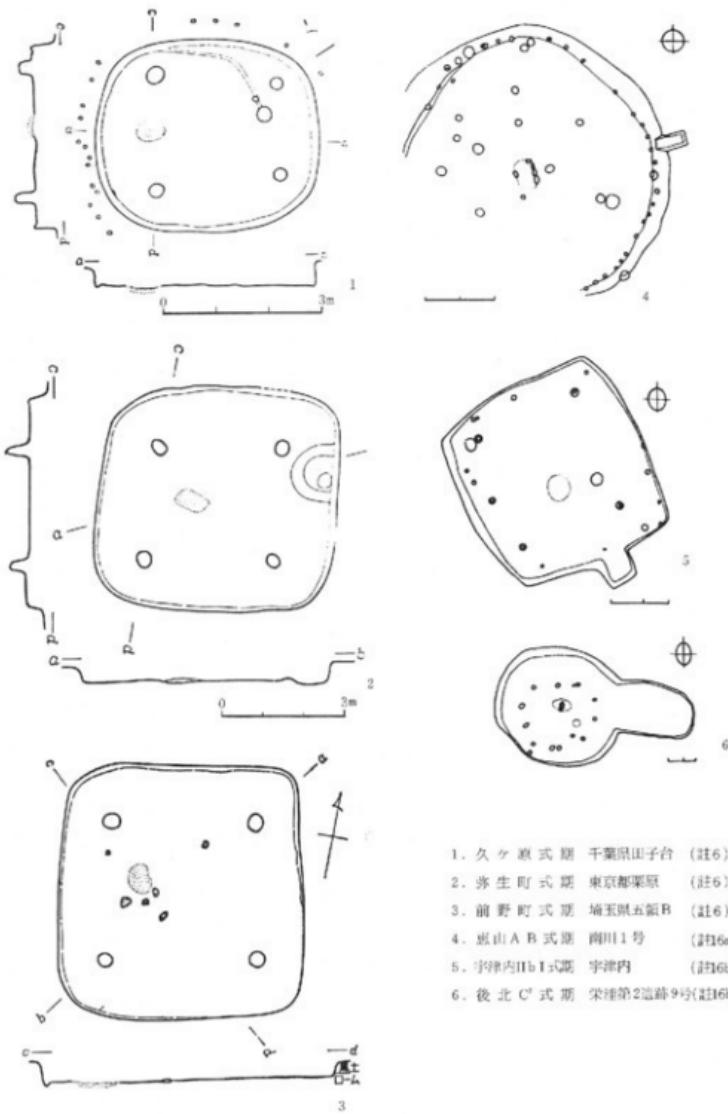
次に天王山式期を除く東北地方の弥生式期の住居跡についてふれておく。従来、該期住居跡も具体例が乏しく、類型化を試みることは困難であるが、最近の2、3の発見例を加えて概述する。

山形県天童市地蔵池例は、周壁が認められず、径4～5mの円形に十数個のビットが巡り、中央に炉が認められた。棚倉式期。<sup>註10)</sup>

岩手県大船渡市長洞見塚例は3.1×3.3mの不整円を呈する竪穴住居で、円形の石床炉が認められ、竪穴の外周に17個のビットが巡っている。時期は樹形団式期である。<sup>註11)</sup>

福島県いわき市伊勢林前遺跡2号住居は、平地式の略円形で、6個の柱穴を配し、地床炉を持つ。同26号住居は3×3mの不整方形を呈する竪穴住居である。前者は中期巾葉、後者は中期後半に属する。<sup>註12)</sup>

福島県いわき市輸山遺跡から、3棟の竪穴住居跡が発見されている。1号住居跡は隅丸長方形で長径5m、短径3.8m、壁の立ち上りは4～11cmと浅い。ほぼ対角線上に主柱穴4個があり、壁の立上り部に十数個の小ビットが認められ、地床炉が3か所に認められた。2号住居跡



第27図 関東地方の弥生後期と北海道縄繩文時代の堅穴住居

は、長径5m、短径2.2mの細長い隅丸長方形を呈する。主柱穴、かは認められず、壁の立上り部に壁柱穴と考えられる小ピットが多数認められた。3号住居跡は、長径3.3m、短径3.28mの隅丸方形を呈し、炉、主柱穴と目されるものは確認されない。壁の立上り部、及び外周に多数の小ピットが巡っている。以上3棟はいずれも後期前半の磐船山式期に属する。<sup>註3)</sup>

他にいわき市大畠貝塚、<sup>註4)</sup>名取市十三塚がある。<sup>註5)</sup>

#### 北海道の続縄文時代住居跡

北海道の続縄文文化と本州の弥生式文化とは、多分に異質的要素を含み、兩文化の住居跡を同列に比較検討することは必ずしも適當ではないが、従来、天正山式文化が多分に北海道的要素を具備するといわれて来たことを考え合わせる時、必ずしも無意味ではないと思われる。

北海道においても、続縄文時代住居跡の発掘例は極めて乏しい。例えば、瀬棚南川遺跡では、墓塚21基に対し、住居跡2棟が発見されている（墓塚は2時期に亘る）。北海道続縄文時代は、大きく恵山期、後北（江別）期、北大期に区分できる。そのうち、北大期の住居跡は、現在知られていない。

まず、縄文晩期終末の例から概述する。永川遺跡例は8.7m×6.3mの楕円形を呈する堅穴住居跡で、炉北側や壁沿いに柱穴が並ぶ。栄浦第2遺跡13号堅穴は、7.4m×6.5mの隅丸方形を呈し、前者と同じく壁沿いに小柱穴が並ぶ。一方の壁に、長さ8m、幅1.5mの舌状の張り出し部がつく。両例共、地床炉を有する。

恵山期の住居跡は、川尻で1軒、絵柄で4軒、南川で2軒等が知られている。いずれも8m～9mの大型の堅穴住居で、石門が持ち、壁沿いに小柱穴を有する点で共通している。ここで南川遺跡第1号住居跡について概述する。大きさは、8.36mの略円形プランを呈し、東壁部に幅45cm、長さ90cmの長方形の張り出し部がつく。壁の立上りは緩やかで、壁高は50～30cm。住居跡中央に、約70×60cmの方形の石門がある。柱穴と思われるピットは計43個で、主柱穴は、いずれも深さ30cm以上の5個が当たられ、壁沿い及び壁部には径10～20cm、深さ10～20cmの小ピットが30～40cmの間隔で認められた。

後北期の住居跡は、前半期では、岐阜第2遺跡10号、15号住居のように、8mの楕円形、円形プランを呈するものと、宇津内遺跡のように、後北A～B C期にかけての堅穴住居跡すべてが方形プランで、壁側面に舌状の張り出し部を有する点で共通した特徴を有する、2タイプが認められる。

宇津内遺跡に特徴的な、舌状の張り出し部は、通路又は出入口と見られ、前述の永川遺跡、後続するC<sup>2</sup>式期に属する栄浦第2遺跡9号堅穴に見られ、北海道東部の地域的特徴と見られている。

開生遺跡20号住居、栄浦第2遺跡9号堅穴は、共に円形プランを呈する堅穴住居で、後北C<sup>2</sup>

式期に属する。

以上を要約すれば、北海道続縄文時代住居跡は、7m前後の大型の竪穴住居で、竪穴のほぼ中央に石圓炉又は地床炉を持ち、壁柱穴を有するものが多い事があげられる。竪穴のプランは、一応円形プランを主流とし、道東部に方形プランで舌状の張り出し部をもつタイプが存在する。尚、この場合、本州の方形プランの竪穴に一般的な、対角線上に4個の主柱穴を有するものは見られないようであり、その系譜は不明である。<sup>註6)</sup>

北海道の続縄文時代と東北地方の弥生時代との横の関係は、現時点では必ずしも明確ではないが、例えば南川遺跡1、2号住居跡は、ともに中村氏の言う恵山A、B期に属し、東北の弥生式編年の中後期に位置づける事は可能である。一方、後北式期後半の位置は弥生末期から古墳時代にまたがる時期と考えて大過ないであろう。<sup>註7)</sup><sup>註8)</sup>

以上東日本の弥生式時代住居跡の傾向について概述した。住居の構築方法は、地面を数十cm掘り凹めて住居を区画する竪穴住居が大勢を占め、東北地方中期前半、北陸地方の後期前半(天王山式期)に平地式住居が僅かに見られる。

住居プランは関東地方では和島氏の指摘の通り、橢円形から隅丸方形への変遷をたどることができる。平面プランの方形化は、大庭遺跡例で明らかのように、既に宮ノ台期には確立されているといつても過言ではない。更には縄文晩期にまでさかのぼって円形プランの住居跡を主体とする集落は例外的にしか存在しない。

西日本では関東地方等と異なり、弥生後期まで円形プランの竪穴を主体とする集落が存在する。また、静岡県登呂遺跡では床の周囲に低い土手を巡らして囲い、その内部を住居空間とする平地式住居が知られている。

東北地方の弥生時代住居跡は、北海道の「円」基調と、関東、中部地方の「方」基調との中间地帯にあって、複雑な姿相を呈している。中期中葉まで「円」基調であったものが、後期に入ると円形プランと方形プランが相半ばしている。これを形式別にみると、磐船山期ではいずれも方形又は長方形で占められ、天王山式期では、円形4、方形2、馬蹄形1とバラエティに富む。両者の際立った住居プランの相違は、前者が北関東にその本拠を置く文化であるのに對して、後者が北海道と関連を持つ東北土着の文化であることを思えば、おのずと説明がつく。また、縄文末期の亀ヶ岡文化期の住居跡が、いずれも円形プランであることも興味深い。

## 註

1. 新潟県村上市教育委員会：「越ノ前遺跡」「新潟県村上市越ノ前遺跡緊急調査概報」1972
2. 「須賀川市史」1970
3. 福島県教育委員会：「伊達西部条里遺構発掘調査報告Ⅰ 福島県文化財調査報告書第59集」1977
4. 伊東信雄：「第四章 弥生文化」『水沢市史Ⅰ』 水沢市史刊行会 1973
5. 藤田定市：「大王山遺跡の調査報告」1951
6. 和島誠一、田中義昭：「住居と集落」「日本の考古学Ⅲ、弥生時代」河出書房 1966
7. 「市原市大原遺跡」房総考古資料刊行会 1974
8. 「茨城県大洗町長峯遺跡」大洗町教育委員会 1973
9. 右智博信：「考古学から見た古代日本の住居」「日本古代文化の探求家」社会思想社 1974
10. 赤堀長一郎：「最上川中流域の初期弥生文化一天童山城生、地成池遺跡にみる文化層を中心にー」『山形県の考古と歴史』柏原亮吉教授還暦記念会 1967
11. 「岩手県人船塚市長谷洞貝塚」 岩手県教育委員会 1972
12. 「伊勢原前遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告書 第1冊、福島県いわき市教育委員会 1972
13. 「輪山遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告書 第4冊、福島県いわき市教育委員会 1977
14. 「原始、古代、中世資料」「いわき市史」第八巻 いわき市 1976 同書によると、磐船山式期の竪穴住居跡2棟が発掘されている。平面プランは、1号が隅丸方形、2号が隅丸長方形である。
15. 不整円形プランに近いという。名取市教育委員会より報告書が近日中発行されると聞いている。
16. 北海道の続縄文時代の住居跡については、下記文献を参考とした。
  - a 「瀬棚南川遺跡」瀬棚町教育委員会 1976
  - b 宇田川洋：「北海道の考古学 2」 1977
  - c 山崎博信：「雄武開生遺跡20号」「北海道考古学」第1輯 北海道考古学会 1965
17. 中村五郎：「北海道南部の続縄文土器縦年」「北海道考古学」第9輯 北海道考古学会 1973
18. 佐藤信行：「東北地方の後北式文化」「東北考古学の諸問題」 1976

## 2. 上ノ原A遺跡出土土器の編年的位置

### 上ノ原A遺跡出土土器の特徴と天王山式土器

上ノ原A遺跡出土土器の特徴を要約すれば次の通りである。

- I 波状口縁又は小突起の発達。
- II 繩文は、縱走する場合が多い。
- III 口縁は、複合口縁又は肥厚する場合が多く、口縁下端に交互刺突文又は刺突文が見られる。
- IV 脚部文様帯は、繩文地の上に沈線手法、まれに光頃繩文手法によって変形工字文風、弧文、菱形文等のモチーフが描かれる。
- V 脚部文様の下限に、下向の逆弧文が用いられる。
- VI 口唇部に、繩文が回転される。
- VII 器面に、有機質の炭化物の付着する例が極めて多い。それは櫛形、精粗の別を問わない。

以上の如き、特異な諸特徴を有する土器群を他に求めれば、弥生後期の天王山式土器をおいて、他に無い。天王山式土器は、福島県南部の白河市久田野字豆柄山及び岩倉山地区、通称天王山において<sup>註1)</sup>藤田定一氏等によって発見、調査され、後、その特異な土器に注目した伊東信雄<sup>註2)</sup>氏によって命名された。天王山式土器の特徴は、中村五郎氏によると

- I 口縁の突起の発達
- II 交互刺突
- III 条の縱走する繩文
- IV 体部文様帶下端の下向きの弧文（しばしば連弧文となる）<sup>註3)</sup>

以上の4点を挙げている。これらの特徴は、いずれも一応、上ノ原A遺跡出土土器群にも共通する。<sup>註4)</sup>

現在、天王山遺跡出土土器は、坪井清足氏によって実測された資料が唯一で、他に藤田定一氏の「天王山式土器の紋様図集」中に坪井氏実測土器以外の土器若干と、土器破片が掲載されているのが公表資料のすべてである。以上の資料によって、中村氏の指摘とは別に上ノ原A遺跡出土土器との共通、相違点を挙げ、対比して見よう。

まず、上ノ原A遺跡出土土器は、土器の特徴及び出上層位から、2群に分類する事が可能である。

#### 第1群土器 No 3 上器、拓19の2例で共に3層出土。

No 3の土器に類縁のものは、天王山遺跡出土第28図10や、常盤広町遺跡出土の大形壺等に求められる。すなわち、袋状口縁、台形状突起、口縁下端にはみ出す交互刺突文帯、比較的大形の壺、特殊な下向弧文等に共通性が認められる（第20図）。

第2群土器 第1群土器を除く残余の土器、ほとんど1層出土。

No1土器は、高80cmに及ぶ全面繩文の大形壺であるが、天王山遺跡に類例はない。No2土器は、充填繩文手法による半欠の同心円文をモチーフとし、底部の極めて小さな不安定な大形壺である。このような、壺形、モチーフを呈する土器は天王山遺跡にはない。天王山遺跡出土土器は、いずれも安定した底部を備えており、底径が口徑の1/3を下まわるものは、大形の壺を除いては無い。No4、No7土器は、共に全面がほとんど繩文のみの中、小形壺であるが、天王山遺跡の中、小形壺には胴下部まで幅広い沈線文、磨消繩文帯が及ぶのが一般的である。又、上ノ原A遺跡の中、小形土器に施文される沈文はいずれも縱走、斜行するが、犬王山遺跡では逆側的に横走繩文が多い。

他に天王山遺跡出土土器に比べて、口縁部、又は胴部境界文としての交互刺突文は顕著でない。胴部文様帶は、右頬又は縱走繩文施文後に沈線文様の描かれる場合がほとんどで、通常の磨消繩文はほとんど見られない。

上ノ原A遺跡出土第2群土器は、以上の様に天王山遺跡出土土器と相違する点がかなり多い。天王山遺跡以外にその類例を求めて、天王山遺跡以外に天王山式土器の一括資料のほとんど知られていない現状では比較すべくもない。強いて、縱走繩文の多用、胸部文様帶の縮小、交互<sup>注6)</sup>刺突文の不顕著、又は退化等の点から、天王山式の後続型式とされた踏瀬大山式にその類似性を認めて、資料が少なく、器形も知られない現状では、良好な比較資料とはいえない。

以上の大雑把な比較操作によって、上ノ原A遺跡第2群土器は一見、いわゆる天王山式土器と近いの特徴を示すが、細部では、かなりの相違点が認められる。従って、ここでは第2群土器に限って「上ノ原式」と仮称し、今後の天王山式土器の細分、地域性を考察する際の一つの目やすとしたい。

#### 天王山式土器の細分

いわゆる天王山式土器は、東北一円、北陸、北関東の一部に広範な分布圏を形成する。東北地方の弥生式にあって、この天王山式ほど広範な分布領域を有する文化は他に無い。各地域から出土する天王山式土器は、その地方、地方によって夫々、かなりの独自性を保持しながら小河川の流域、又は盆地を一つのファクターとして分布圏を形成している。この、各地域のいわゆる天王山式土器及び細分については、中村五郎氏、興野義一氏等によって論究されている。<sup>注7)</sup>私はこれとは別に、各地域の天王山式土器をいくつかにグルーピングしている。以下に、大まかなグルーピングの様態を示しておこう。

I 口縁、又は文様帶中に燃糸文を多用するグループ。宮城県大崎地方に分布。

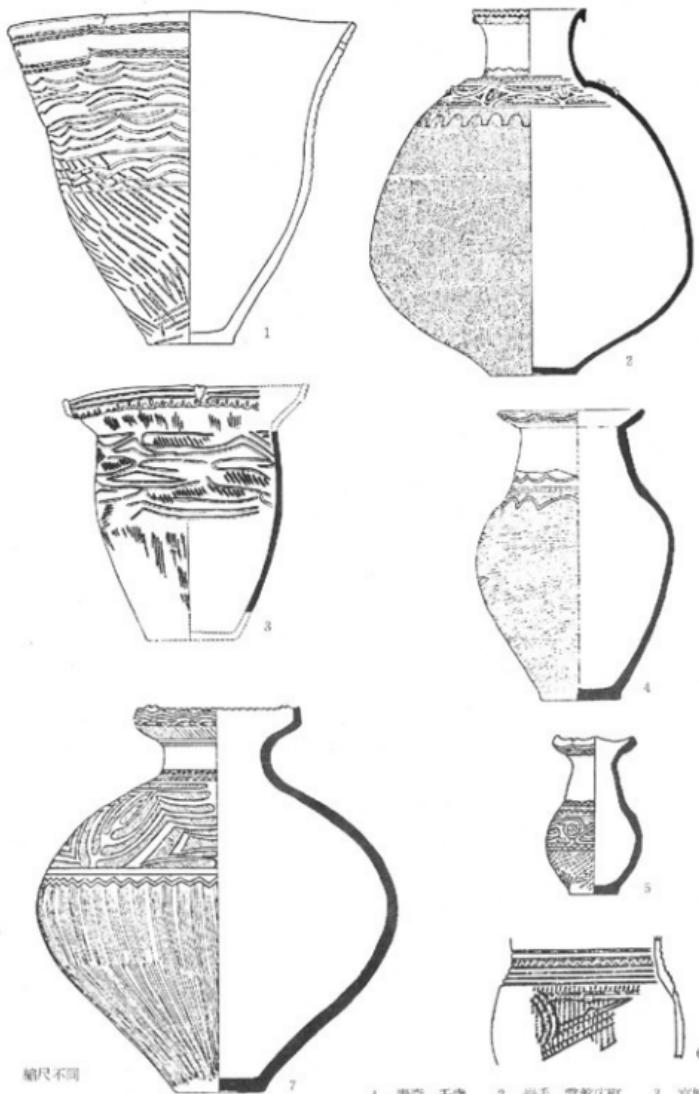
II 複合口縁をなさず、「ハ」の字形刻文、繩線文が盛行する。繩文は、斜行する特殊繩文。宮城県北部から岩手県北部に分布。



『弥生式土器集成本編Ⅱ』による

0 10 20 cm

第28図 天王山遺跡出土土器



第29図 各地域出土の天王山式土器

1. 青森、千歳  
4. 宮城、東中根  
7. 新潟、砂山  
2. 岩手、常陸広野  
5. 福島、中開津  
3. 宮城、棚口  
6. 富山、瓢川  
(出典は次ページ文載)

- III 磨消繩文による幅広い胴部文様帯を有する一群。秋田県北部に分布。
- IV 脇部文様帯の沈線文のある部分に、三角の小はみだしが付加されるグループ。出土例は少ないが、秋田県南部から富山県にかけての裏日本側に分布。
- V 交互刺突文が、口縁上部又は口唇にまで及ぶ一群。宮城、山形、岩手に分布。
- VI いわゆる踏瀬大山式に類縁のグループ。岩手、山形、宮城、福島に広範に分布。
- VII 複合口縁が顯著でなく、交互刺突文を主体的文様としないグループ。青森、山形に点在する（更に細分できる）。
- VIII 口縁部、又は文様帯中から繩文が減少、又は消失するグループ、山形、岩手に分布。
- 以上I～VIIまでグループ化したが、更にいくつかのグループが可能である。これらの各グループは、時としてからみあい、重なりあって複雑な分布図を形成している。又、以上の各グループは、単に地域相のみならず、年代的な幅をも示していると考えている。
- 尚、以上に述べたグループ化の根拠とその詳細、及び各氏の天王山式土器細分論に関して触れるのが本筋ではあるが、それには多くの紙数を要するので早い機会に改めて述べる。

#### 上ノ原A遺跡出土土器の編年的位置

ところで、いわゆる天王山式における上ノ原A遺跡出土土器の専有する時期は第1群土器は常盤広町遺跡に近接した時期、すなわち天王山式の内ではやや古手に属するものと見たい。第2群土器は、踏瀬大山式に近縁の、いわゆる天王山式土器の内ではやや新しい時期に属するものと見ている。

#### 註

1. 藤田定市：「天王山遺跡の調査報告」1951
2. 伊東信雄：「東北地方の弥生式文化」文化214 1950。尚、発見・調査者の藤田も早くから天王山式の名称を用いている。註5文献
3. 中村五郎：「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』東北考古学会 1976
4. 岩井清足：「福島県天王山遺跡の弥生式土器」史林第26巻1号 19
5. 藤田定市：「天王山式」器の模様図集」1951
6. 註3文献及び『福島県史 第6卷』1964
7. 奥野義一：「一迫町の考古学」『一迫町史』1976 奥野義一・遠藤哲一「宮城県工造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史』1970  
中村五郎：註3文献等

### 3. 上ノ原A遺跡出土石器をめぐって

今回の調査で発見された石器には、剥片石器として石錐、各種のスクレーパー、磨製石器として、石斧、石皿、ハンマーストーン等がある。尚、発掘前及び上ノ原B、C遺跡では、いずれも1.5cm内外の小形のアメリカ石錐が数点ずつ採集されている。

ところで、天王山式の石器インダストリーは、どのような内容を持つのであろうか。天王山式の標式遺跡である天王山遺跡では、石錐（有柄錐、アメリカ石錐）、不定形スクレーパー、石槍、環状石器、管玉、半小玉、石皿、タタキ石等が確認されている。次に、異型式を含まない比較的、単純な天王山式期遺跡の石器組成を第4表に示す。

第4表 天王山式期遺跡の石器組成

遺跡	有柄無柄錐	アメリカ石錐	石槍	石錐	石斧	石器	スクレーパー	磨石斧	磨石器	環状石器	管玉	半小玉	タタキ石	フレーク	其他
上ノ原A、B、C		7	1	1			11	1						多	石皿、ハンマーストーン
天王山	2	30	1				多数			1	2	多?	石槍、ハンマーストーン、半小玉		
鬼ノ首	6	2		2(?)	2(?)					1					
常盤広町	8	9					5			(圓形)	25	多	ガラス小玉		
六地山		4								1					

この表でも明らかなように、天王山式の一般的な石器組成は、石錐（有柄、アメリカ石錐）、スクレーパー、環状石器の3種で、これに石槍、石錐、石斧、磨石斧、管玉、石皿、凹石、磨石等が、時として伴なう。この内、弥生時代になって出現する石器、石製品は、アメリカ石錐、管玉の2種で、アメリカ石錐は、天王山式に特有の石器と言っても過言でない。管玉は、弥生時代以降、かなり長期に亘って存続するが、その用途は葬制に関連する事をもって一貫している。ガラス小玉も同様の用途を持つ製品と考えて良いだろう。

環状石器は、東日本の弥生時代に多出し、特に天王山式に顯著に伴なう傾向が強い。しかし、<sup>註1)</sup> 同様の形態を有するものは、既に縄文時代にあり、縄文時代晩期の伴山石器にも認められるので、縄文時代からの伝統的な石器の一類と認められる。

以上の石器を除く残余の石器群は、どれも縄文時代にその系統、系譜がたどれる、いわば、縄文時代の伝統的な石器群と言って良い。石包丁や大陸系の磨製石斧（太形蛤刃、扁平片刃、抉入、石ノミ）等は、天王山式の遺跡からは全く出土しない。弥生後期には、凡日本的に石器類の激減化現象が認められる。その中で、東北地方の弥生式文化が後期に入りても尚、石器に依存し、しかも縄文時代からの伝統的な石器群を愛用した背景には、天王山式文化の生産活動が大きく係わっていると思われる。

次に、東北地方の弥生時代石器の組成を、各時代、各県別にまとめ第5表に示す。



第5表に明らかなように、福島、山形、宮城3県と、秋田、岩手、青森3県とは伴出石器が質的に異なる。ここでは便用上、前者3県を東北南部、後者3県を東北北部とする。

東北南部では第5表で見る限り棚倉式になって石包丁、扁平片刃石斧、石ノミ等の弥生期特有の石器が出現するが、宮城県内では福浦島下層式に属する名取、カラト塚で石包丁、高清水戻田遺跡で扁平片刃石斧、太形棒状石斧等が採集されており、不確実だが弥生系石器の初源は弥生初期にさかのぼる可能性がある。

一方、福島では、楔形圓式期になって弥生系石器が出現するが、新潟県境に近い吉崎遺跡では、棚倉～楔形圓式期にかけての墓跡から、多量の太形蛤刃石斧、定角石斧、打製石斧（石鎌）、管玉と独鉛石、石錐等が発見されている。又、浜通りの鹿島天神浜遺跡では、多量の石包丁、太形蛤刃、扁平片刃、石ノミ等の磨石斧、石鍬、石匙、石槍、石錐等の打石器及び凹石が出上している。特に、石包丁86点、扁平片刃石斧45点、打製石鎌64点という一遺跡出土石器としては驚異的な數字を示している。出土土器は、桜井式の新しい弥生時代を主体に、棚倉式、楔形圓式等をも含んでいるようである。福島では、相馬地方を中心に弥生系石器が多出するが、その時期は桜井式を中心とする時期である。

山形でも、確実に弥生系の磨製石器が出現するのは、一応、桜井式期と見ておきたい。

以上の事から、東北南部で弥生系石器が出現するのは、或る地域では弥生初期に通りうるが質量共に一般化するのは楔形圓式期以降であり、桜井式にピークを示す点で共通する。福島県浜通りから茨城県にかけて主要文化圏を有する磐船山式期になると、石器は急速に激減又は、消滅と向かう。磐船山式とはほ時を同じくする天王山式期では、縄文時代からの伝統的な石器群を主体とし、アメリカ石鎌、管玉等が伴なう。東北南部での石器消滅の時期は、東北北部と同様に、天王山式に後続する形式が不明確な為、その様相は不明である。

東北北部では、弥生期全般を通じて、石鎌、スクレーパー、磨製石斧、打製石斧等が主体的な石器組成を占める。その内、青森県では、二枚橋式期にツツ型石器、扁平小形磨石斧、田舎館式期に擦切片刃石斧等の北海道続縄文時代恵山期の石器が伴出し、両地域の有機的関連を知る。秋田県では、宇津ノ台遺跡や農耕文化の所産とされる志麻沢遺跡にても、縄文時代と質的に変化が見られない。後期に至っても、南部の狐崎遺跡でアメリカ石鎌が目新しいだけで、北部の小坂地方に至ってはほとんど石器類は伴なわない。

岩手県では、橋本遺跡で縄文的な石器群とアメリカ石鎌、管玉等の弥生系石器が伴ない、常盤広町遺跡では、弥生系の石器、玉類のみの組成となる。

東北北部に、弥生時代になって出現する石器、石製品はアメリカ石鎌、管玉のみで、管玉は弥生時代墳墓に副葬されるのが一般的で、津軽海峡を越えて北海道続縄文時代前期から中期の墳墓にもやや一般的に副葬される。

アメリカ石器は、二等辺三角形の鐵の基部近くの両側から抉りを入れ尾翼を作り出すもので、東日本、特に東北地方の弥生時代遺跡から多出する。前述したように、アメリカ石器は弥生前半期には不顕著で、弥生後半期に顕著となり、天王山式期の主要遺跡ではいずれも石器組成の重要なシェアを占めている。

東北北部地方における石器消滅の時期については明確に知られていない。各県とも、天王山式期までは確実に石器は存在する。天王山式に継続する形式と目される鳥海山（青森）、一本松（岩手）、小坂（秋田）等では、いずれも石器類の出土は確認されていない。この事から、東北北部における石器消滅の時期は、天王山式期からさほどへだたらない時期と考えられる。

新潟県については、天王山式に関する部分のみ収録したが、瀬ノ前、六地山町遺跡とも、東北地方の天王山式期の石器組成と変化は認められない。

東北地方のこの様な様相に対し、その北の北海道では、又異った様相を呈する。1例を示せば、瀬棚南川遺跡では第6表の様な石器組成を示している。石器が多いのは遺構の大部分が墓壙という遺跡の性質によるものであろうが、器種において、墓壙出土石器と住居跡出土石器に変化は見られない。この中で興味深いのは、縄文的な石器群を主体としながら、続縄文時代になって出現するツク型石器や、弥生時代特有の磨製石斧に類似するものが相当量伴出している。

第6表 瀬棚南川遺跡出土石器組成

石器	石器	石器				石器				石器				石器				石器			
		ナツク状石器	削器	石核	剥片	石器	A-(1)	A-(2)	B-(1)	B-(2)	B-(3)	圓片	扁平片	台形	円盤	台形	円盤	台形	円盤		
有柄 無柄		(ツク型石器)				圓片	A-(1) 太形船刃?	A-(2)	B-(1) 抉入(柱狀)	B-(2)	B-(3) 扁平片刀										
150	29	8	12	26	28	7	558	1?	2	2	3	22	3	4	2	7	1	1	3		

事である。報告者は、磨製石斧を2群5類に分ち、A-(1)類を太形船刃、B-(1)を柱状片刃、B-(3)類を扁平片刃石斧に夫々対応させている。

扁平片刃石斧は惠山式に普遍的に伴出するが、縄文晩期終末の大狩部式、タンネトウム式期に既に出現しており、北海道内の出土例が、多く擦切手法によって製作されている点等を勘案すれば、弥生時代の扁平片刃石斧と系統を冠にするのかも知れない。

他に、宇津内遺跡A地点8号竪穴から抉入片刃石斧が発見されており、フゴッペ洞窟でも柱状石斧が後北C式石器に伴出しており、後者について報告書は、類例が棒太方面に多出する事から、その方面からの系譜を求めるとした。

以上のように、北海道続縄文時代前期～中期にかけて、弥生時代の磨製石斧、又は類品が出土する。これらの系譜が一元的なものか疑問の点もあるが、東北南部と北海道をつなぐ、東北北部における弥生系石器の貧困さは、この地方が農業牛産の未発達により、生活基盤が不安定であった事を示唆しているといえよう。

## VII まとめ

- 1 上ノ原A遺跡は、宮城県栗原郡北部の一迫町川口に所在する。遺跡の立地する上ノ原丘陵は、一迫川と長崎川の中間地帯を占める海抜135～150mの平坦な台地状地形であり、丘陵面を中心として約1km<sup>2</sup>の範囲に亘って弥生式時代後期の遺跡が点在する。中でも上ノ原B、C両遺跡は出土土器が上ノ原A遺跡のものに近似し、これらの遺跡が同じ時期にひとつの集落を構成していたものと推定される。
- 2 発掘によって検出された遺構は、天王山式期の竪穴住居跡1棟である。平面形は馬蹄形で長径4.2m、短径4.0mの規模を有している。この形態のものは、他県の同期の住居跡、例えば新潟県瀧ノ前、福島県仮供田の円形プラン、岩手県常盤広町の隅丸方形プランとは異なり、それらの中間形態を呈している。
- 3 竪穴住居跡内から、遺存の良い炭化材が発見され、火災に遭って倒壊した家屋の板壁材であろうと推定した。文献等によると、最近、各地で炭化材を遺存する住居跡が発見されているようだが、記述、図面が少ないので、ここで比較検討することは十分できなかった。今後類例の詳細な報告を待ちたい。
- 4 発掘によって出土した遺物は、土器と石器である。土器は復原、図化できたものが8個体あり、破片が若干ある。土器の内、No.1とした壺形土器は高さ80cmあり、天王山式土器としては最も大きい。
- 5 山土土器は、全て竪穴住居跡焼失後投棄されたものであり、数度に亘って投棄されたことが観察される。特に、第1群土器と第2群土器との間には、層位的な先後関係が観察されるだけでなく、土器の文様にもかなりの相違点が観取でき、天王山式期に属するとしても、ある程度の時間差を考慮しなければならないだろう。第1群土器よりも新しいと考えられる第2群土器を今後の形式細分化の目安とする意味で、上ノ原式と仮称したい。
- いわゆる天王山式土器は、最近、青森県等東北地方北部でも相次いで発見され、更に北海道南部でも発見され始めて、分布範囲が拡大しつつある。それに伴なって縄繩文文化と弥生式文化との融合接触関係も次第に明確にされるであろう。
- 6 出土石器には、石錐、各種スケレイバー、磨製石斧、石皿、ハンマーストーン等があり、縄文時代からの伝統的な石器の各種組成によって占められている。天王山式期の石器が弥生式特有の磨製石器を全く含まない点で軌を一にすることが、上ノ原A遺跡の発掘調査でも明らかになった。

## (付) C-14年代測定による推定年代について

C-14年代測定のために、床面炭化材B群5の一部を、社団法人日本アイソトープ協会に依頼したところ、つぎの報告を受けたので全文を掲載する。

### 測定結果報告書

昭和52年10月11日に受取りましたC-14試料1個の測定結果ができましたので報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C-14年
N-2959	上原-1	2090±80Y (2030±80Y)

年代14Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの 5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B. P.）として示されています。付記された年代的誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読み取りの誤差から計算されたもので、14C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお14C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。（御希望の方には、これに関する参考文献を差し上げます。）

この測定結果につきてコメントがございましたならば、是非お聞かせ下さいますよう、お願い申し上げます。

昭和53年1月26日

社団法人 日本アイソトープ協会

当方から、報告された14C年代が、弥生時代後期という考古学的年代に比べて古い旨の疑問を送付したところ、測定担当者から、参考文献と大略つきのような回答を頂いた。

生育していた木が切られて、住宅などに使用された場合、その使用された年代を示すのは、その木の一番外側になる。（中心になるほど古い年代を示す）。また、使われた試料が、当時生育していた木か、すでに枯死していたものか、流木かということも問題になる。

文献（日本アイソトープ協会、浜田知子「14C年代測定担当者から考古学者へ」『考古学と自然科学』第8号1975）の5年代の誤差の項で、浜田は「14C年代は樹輪年代よりも、0～1000 B. P. ではやや若く、1000～2000 B. P. ではやや古く、2000～7000 B. P. ではかなり若く出る傾向がある。その差は0～1000 B. P. では200年以下、1000～2000 B. P. では100年以下、2000 B. P. 以前においては800年におよんでいる」と述べている。

## 付表一覧

第1表 上ノ原A遺跡出土土器	38
第2表 上ノ原遺跡出土石器	40
第3表 東北地方の弥生時代住居跡一覧	49
第4表 天王山式期遺跡の石器組成	60
第5表 弥生時代の石器組成(東北地方)	61
第6表 瀬棚南川遺跡出土石器組成	64

## 付図一覧

第1図 上ノ原A遺跡位置図	6
第2図 上ノ原A遺跡付近地形図	7
第3図 上ノ原B遺跡出土土器拓影(I)	10
第4図 上ノ原B遺跡出土土器拓影(II)	11
第5図 上ノ原C遺跡・大穴山遺跡出土土器拓影	13
第6図 上ノ原B、C各遺跡出土土器拓影	14
第7図 山ノ神遺跡出土土器拓影	15
第8図 上ノ原A遺跡の発掘区と竪穴住居跡	18
第9図 ピット断面図	19
第10図 上ノ原A遺跡炭化材出土状況実測図	21
第11図 炭化材A群	20
第12図 炭化材B群	22
第13図 炭化材C群	22
第14図 炭化材D群	23
第15図 炭化材E群	23
第16図 炭化材F群	23
第17図 4区における遺物出土状況	27
第18図 上ノ原A遺跡土器実測図(I)No. 1土器	29
第19図 上ノ原A遺跡土器実測図(II)No. 2土器	31
第20図 上ノ原A遺跡土器実測図(III)No. 3土器	32
第21図 上ノ原A遺跡土器実測図(IV)No. 4~No. 8土器	35
第22図 上ノ原A遺跡出土土器拓影	37

第23図	上ノ原A遺跡出土石器実測図(Ⅰ).....	42
第24図	上ノ原A遺跡出土石器実測図(Ⅱ).....	43
第25図	上ノ原A遺跡出土石器実測図(Ⅲ).....	44
第26図	天王山式期の竪穴住居跡例.....	48
第27図	関東地方の弥生後期と北海道続縄文時代の竪穴住居.....	51
第28図	天王山遺跡出土土器.....	57
第29図	各地域出土の天王山式土器.....	58

## 図版一覧

図版1	上ノ原A遺跡空中写真および遺跡.....	69
図版2	上ノ原A遺跡近景、発掘区および遺物出土状況(Ⅰ).....	70
図版3	遺物出土状況(Ⅱ).....	71
図版4	遺物出土状況(Ⅲ).....	72
図版5	遺物出土状況(Ⅳ) 炭化材.....	73
図版6	竪穴住居跡全景.....	74
図版7	No. 1土器(大形壺).....	75
図版8	No. 2土器(甕).....	76
図版9	No. 3土器(広口壺).....	77
図版10	No. 4. No. 6土器.....	78
図版11	出土土器破片(Ⅰ).....	79
図版12	出土土器破片(Ⅱ).....	80
図版13	出土石器(Ⅰ).....	81
図版14	出土石器(Ⅱ).....	82
図版15	出土石器(Ⅲ).....	83
図版16	出土石器(Ⅳ).....	84

# 図 版



1. 空中写真

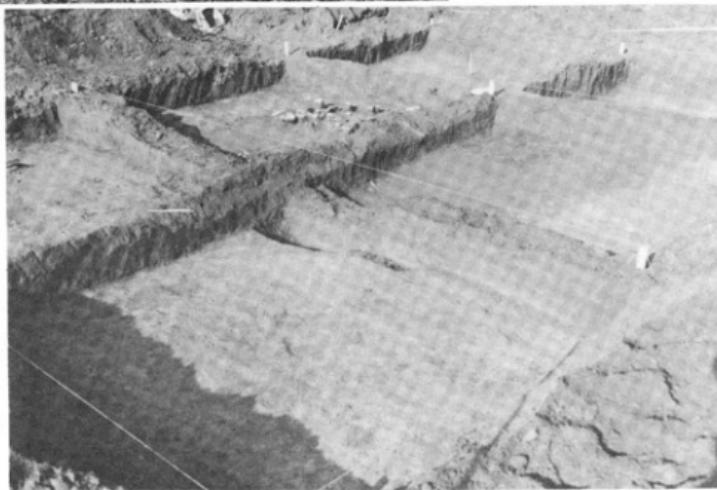


2. 遠景(北東から望む)

図版Ⅰ 上ノ原A遺跡空中写真および遠景



1. 近景(北から望む)



2. 発掘区(南東から望む)



3. 遺物出土状況Ⅰ

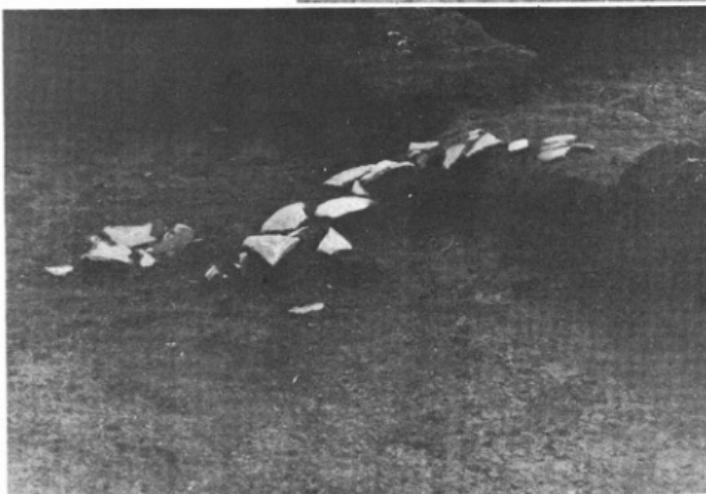
図版2

上ノ原A遺跡近景、発掘区  
および遺物出土状況(I)

1. 4—2群



2. 4—3群  
—傾斜状況



3. 4—3群  
No. 2 土器



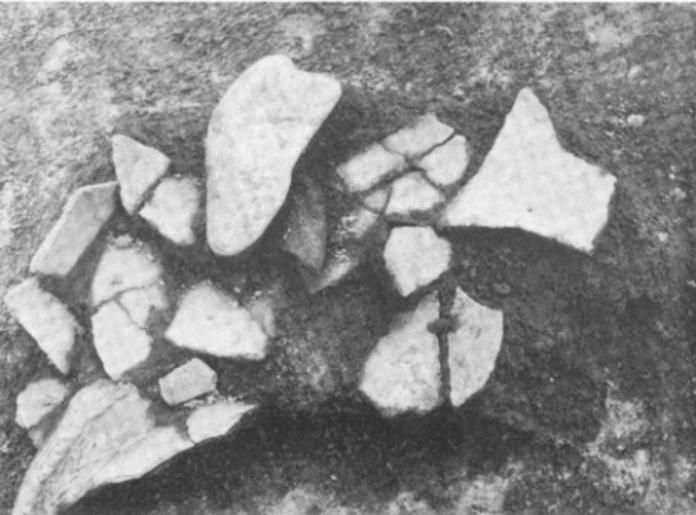
図版 3 遺物出土状況 (II)



1. 4—2群一部  
石器



2. 4—5群  
No. 3 土器



3. 4—6群

1. 南壁から望む  
手前 D群  
後方 B群



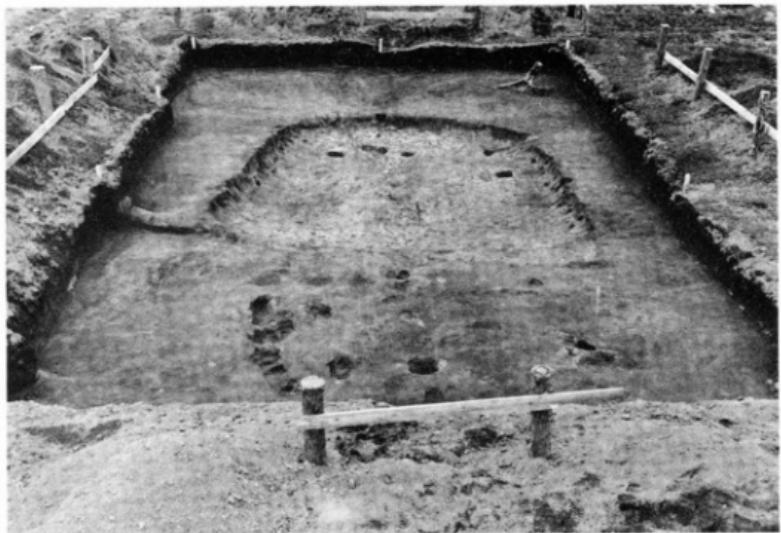
2. 炭化材 D群



3. 炭火材 B群  
北壁から見る

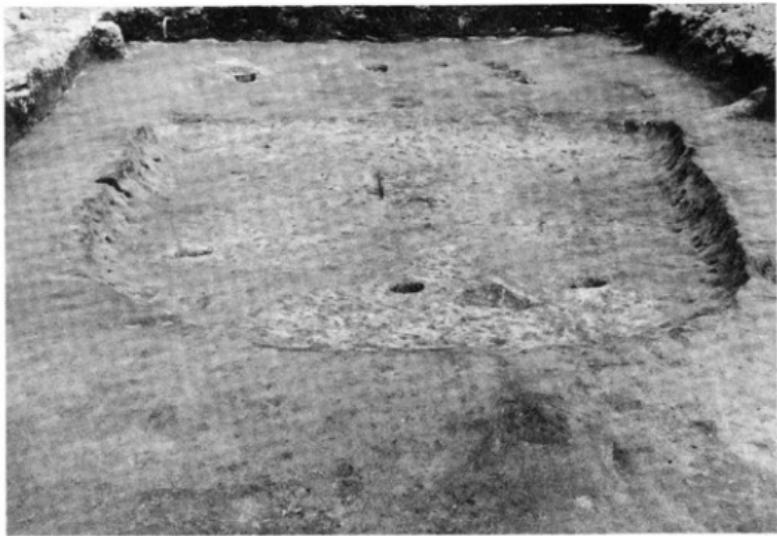


図版5 遺物出土状況(IV)  
炭化材

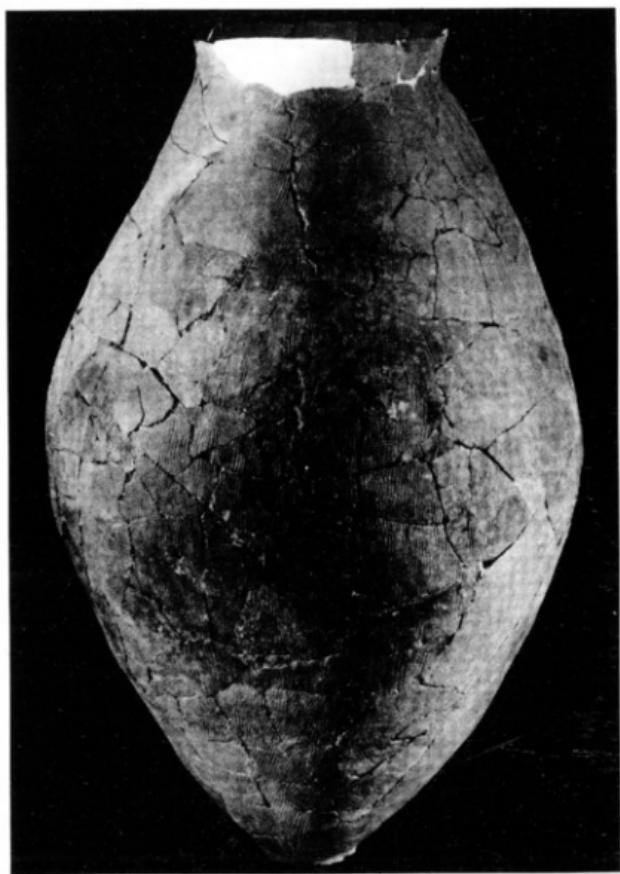


1. 東から見る

2. 西から見る



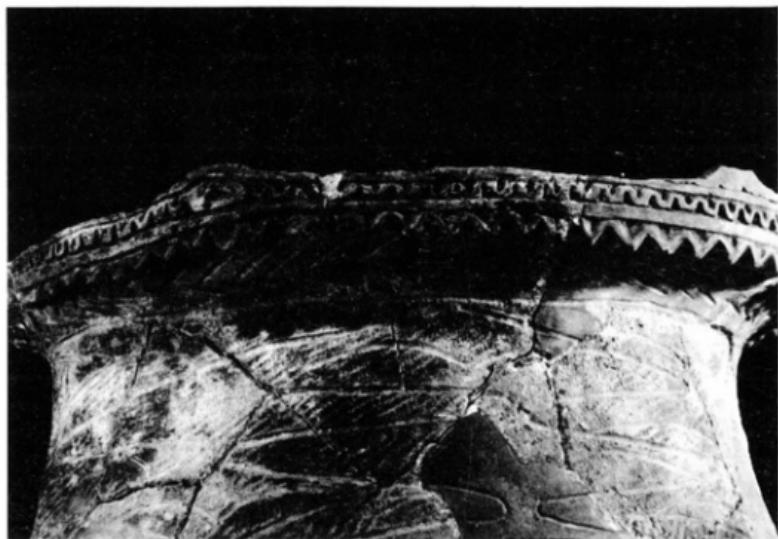
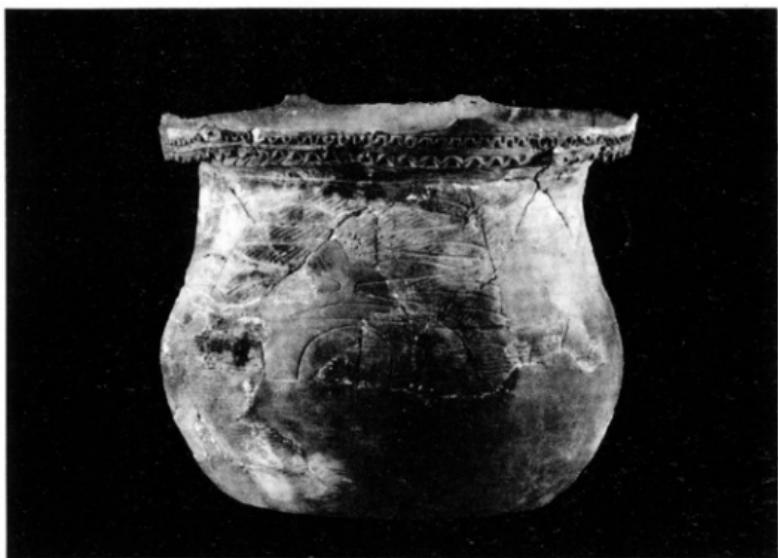
図版 6 積穴住居跡全景



図版 7 No. 1 土器(大形壺)



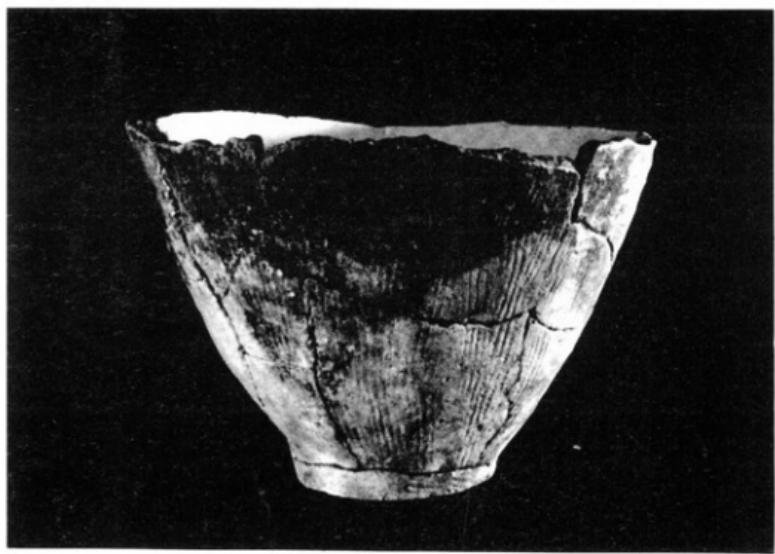
圖版 8 No. 2 土器(甕)



図版 9 No. 3 土器(広口壺)



1. No. 4 土器(小形窯)



2. No. 6 土器(小形鉢)

圖版10 No. 4、No. 6 土器



圖版II 出土土器破片(I)



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22

图版12 出土土器破片(II)



図版13 出土土器(I)



図版14 出土石器(II)



11



13



12

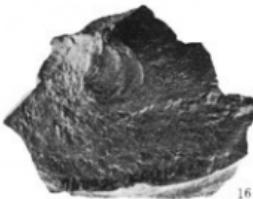


—

14



15



16



—

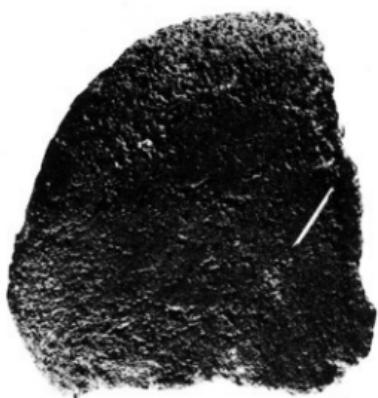


17

圖版15 出土石器(III)



18



21



20



—



—



19

図版16 出土石器(IV)

1978 ©

宮城県一迫町文化財調査報告書 第3集

## 上ノ原A遺跡

—弥生後期の住居跡—

昭和53年3月20日 印刷

昭和53年3月25日 発行

発行 一迫町教育委員会

宮城県栗原郡一迫町真綾字田川前5

TEL:(0228)2-3141

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 25-6466

